

第3章 大都市の20歳代の職業意識の分析

第1節 はじめに

本章では、2011年2月に実施された第3回若者のワークスタイル調査のデータを用いて、大都市の20歳代の職業意識について検討する。分析の前半(2節)では、後に示す設問への回答の分布を、職業意識が異なると予想される諸変数ごとに見ていく。また、10年前に実施された第1回若者のワークスタイル調査にも、ほぼ同様の文言の設問が存在する。分析の後半(3節)では、第1回調査の結果と第3回調査の結果を比較し、2001年時点の20歳代(1971年～1981年生まれ)と2011年時点の20歳代(1981年～1991年生まれ)で、どのように意識が違うのか(あるいは変わらないのか)を提示する。

1990年代には、戦後からの長期的な豊かな社会の到来、バブル崩壊前後からの経済の変化や雇用・就労環境の変化などを背景とした職業世界の変容に呼応する形で、若者の職業意識(職業観・労働観)が変化していると考えられ、それを捉えようといくつかの角度から説明が試みられていた。代表的なものだけでも、自分主義の強まり、自己実現志向やこだわりの強さ、仕事の手段化、余暇志向(および仕事との両立志向)、脱会社志向、頑張りの低下、人間関係の重視とその煩わしさ、離転職志向、と枚挙にいとまがない¹。このような1990年代の若者の職業意識の把握は、既存の企業就職や雇用慣行に乗らない新しい世代をいかに捉えるかということに主眼が置かれていたように思われる。

しかしながら、そのような典型的な就業における若者の問題とともに、1990年代後半から2000年代初頭以降、第1回本調査で中心的に扱ったフリーターのような非典型的な就業の問題が、2000年代中盤前後からは、職業世界への参入そのものに困難を抱える若年層(例えば、NEETの状態にある者)の問題が、より一層注目されていった。

職業意識という点でそうした問題にアプローチしたものとして、例えばフリーターについての調査・分析をあげると、日本労働研究機構(2000: 70-85)は、ヒアリング調査のデータをもとに、「フリーターのメリット・デメリット」「世間のフリーター観」「正社員観」「フリーターの理由」「フリーター経験による変化」の5つの観点からフリーターの職業意識を分析している。また、質問紙調査の分析としては、第1回本調査を分析した日本労働研究機構(2001: 31-77)や下村(2002)、職業意識の分析から多様なキャリア教育の必要性を論じた亀山(2006)がある。

こうした約20年間の若年者雇用の文脈における先行研究・調査の蓄積がある今日は、2000年代初頭以上に問題が複雑かつ困難になっていると考えられ、また、日本社会に存在するさまざまな格差の問題が人口に膾炙した時代にある。こうした時代における若者の職業

¹ 座談会形式のものから調査データに基づく論考まで、さまざまな所で論じられている。例えば、佐藤ほか(1991)、堀田(1991)、江上(1991)、など。

意識は、どのような状況にあるのだろうか。本章で検討していきたい。

本章で扱う職業意識の内容を具体的に説明しておく。若者の職業意識と一口に言っても、職業に関するさまざまな意識項目が先述した諸研究および調査でとりあげられているが、本章では第1回本調査の問題意識を基本的に継承する形で、同様の職業意識を分析対象とする。

第1回調査時の分析において、日本労働研究機構（2001: 54）は、職業意識に関する質問項目を、主成分分析法を用いて「フリーター共感」「能力向上志向」「栄達志向」「仕事離れ・迷い」の4つに集約した²。第1回調査において、この四つの成分によって提起された問題意識は、次のように説明できる。

第一に、「フリーター共感」については、「フリーターを支える意識は、若者に広く共有されている」（日本労働研究機構 2001: 54）として、移行過程の変容において供給側（若年者）に非典型的な就業行動への支持・共感が存在する、としている。こうした支持・共感第1回調査から10年経った現在、どのような様相を呈しているのか。若者の多様化がますます注目されている今日、そうした支持・共感も多様なものになっているのかという点を確認する必要がある。

第二に、「能力向上志向」からは、若年者の意欲とフリーター離脱の関係の問題を考えることができる。専門知識や資格はフリーター離脱の資源となりうる。これらの取得に対する若年者の意欲に応えるための一つの支援として、職業能力開発の機会の提供を日本労働研究機構（2001: 27）が提案しているが、そうした意欲が現在も維持されているのか。もし状況が変化しているならば、資格や専門知識に対して具体的なイメージをもつための教育を提供するなど、能力開発機会以前の支援の強化も考えなくてはならないのではないか。変化については第3節で検討するが、さしあたって第2節で現在の状況を確認することが必要である。

第三に、「栄達志向」については、第1回調査時に、「有名になりたい」「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」といった考え方が＜夢追求型＞フリーターに特徴的であるとされた（日本労働研究機構 2001: 91-93）。この志向は、一旗揚げることを目指した働き方に通じる点でリスクである一方、将来に向けて野心的・意欲的に活動することを支えるものであると考えうる。仮にこの志向自体が衰退しているならば、職業アスピレーションの低下、就業行動を支える原動力自体を若者が失いつつあることを意味するのではないか。こうした変化を第3節で検討するためにも、第2節で現在の状況を把握する。

第四に、「仕事離れ・迷い」については、「フリーター選択の背景に強く働く意識」と考えられる（日本労働研究機構 2001: 54）。この意識の高まりの有無は、非典型的な働き方に

² この4つと具体的な項目の対応に関しては、本章の図表3-1を参照。

対する自発的な選択の問題のみならず、職業世界からの離脱や就業行動に対する不活発層（NEET など）がますます社会問題化された 2000 年代の状況を鑑みても、注目に値する。

こうした問題意識のもとに、2011 年時点において大都市に住む 20 歳代の若者の職業意識の現状を理解したい。

加えて、次節からの分析の前に、若者の職業意識を捉える際のいくつかの切り口（変数）をあげておきたい³。

第一に、ジェンダーや性別役割分業の観点から、若者の職業意識を考えることができる。育児支援と女子青年および男子青年の職業意識の関係について論じている村松（2001）、ジェンダーと雇用の典型／非典型の組み合わせで第 1 回本調査を分析した日本労働研究機構（2001: 163-185）、ジェンダーの観点からフリーター現象を分析した本田（2002）などが問題化しているように、現実の職業世界は、その存立という点で性別・ジェンダーと分ちがたく結びついている。

第二に、一口に若者や若年層といっても、10 歳代から、後期若年層とされる 20 歳代後半および 30 歳代まで、幅広い年齢層を対象とすることには言うまでもなく留意が必要である⁴。こうした年齢段階による対象の把握を、雇用・就業といった領域に適応すれば、先行研究・既存の調査もいくつか分類可能である。職業への移行やそこにつながる進路意識を問題とし、高校生・大学生を対象にしたもの。職業世界へ足を踏み入れた段階の若者から社会の就労状況を読み解こうとし、新入社員を対象にしたもの⁵。結婚や家族形成といったライフコース上のイベントが問題化される段階での若者の就労を扱ったもの、など。若者にとっての就業・労働上の課題のバリエーションは、教育から職業への移行の中断のなさや年功賃金評価をその特徴として持ち続けてきた日本社会において、年齢を重ねて段階を経ることによりかなりの程度対応すると考えられる。よって、年齢の考慮が必要である。

第三に、雇用形態や職種、職業キャリアが職業意識に関連していることが考えられる。職業についての意識なので、対象の現在および過去の就労経験がその形成に影響している可能性と、ある職業意識をもっている者が特定の就業行動をとる傾向にある可能性の両方

³ ここでとりあげたもの以外にも、社会階層、経済的状況（所得、資産など）等、さまざまな変数を考えることができる。また、日本労働研究機構（2001: 9）は、学校から職業への移行過程の変化を促す要因を、労働力需要側の要因、供給側の要因、マッチングシステムの要因の三つに分け、このうちの供給側の要因の一つとして若者の就業意識（の変化）を挙げ、この形成を規定している要因として、以下のものを想定している。

- ・学校に関わる要因：進学層の拡大、高等学校の「水路付け」機能や社会化の機能の低下、「個性」重視の教育政策・進路指導の展開
- ・家庭に関わる要因：親への依存の長期化、家庭の教育力の低下、少子化（きょうだいの減少）、結婚年齢の上昇
- ・若者文化に関わる要因：消費文化への接触の低年齢化
- ・その他の要因：交友関係の変化、在学中のアルバイト経験

⁴ 加えて、年齢段階で捉えるか、世代・コーホートで捉えるかでも、論じられることは変わるだろう。

⁵ 例えば、公益財団法人日本生産性本部の「職業のあり方研究会」と社団法人日本経済青年協議会は、毎年、新入社員に対する意識調査を行っている。

が考えられるが、いずれにせよ、就労の経験の考慮が必要だろう。

第四に、学歴や教育という変数が考えられる。これもまた、意識形成に対する教育の直接的な効果（例えば、進路指導や職業教育によるもの）と、教育とそれにより獲得した学歴が上述した第三の変数（就労の経験）に関連することによる間接的な効果、両方があるだろう。

第五に、現在の家族形態が職業意識に関連していることが考えられる。例えば、働いて食いぶちを確保する目的に自分以外の他者（家族）の生存がある場合には、就労に対するモチベーションが高く、逆に、就労以外に経済的基盤を確保する術（その一例として、家族が保有する潤沢な財産）がある場合には、就労に対するモチベーションが高くない可能性が考えうる。

最後に、地域という変数も忘れてはならない。序章でも説明しているが、3回にわたって実施された本調査は、東京居住の若者を対象にしている。この対象を一般化して日本全体の若者について語ることはできない。なぜなら、例えば都市と地方という対比を考慮しただけでも、両者の間には、就労機会、産業構造、文化の蓄積、教育水準、対人ネットワークの量と種類などの違いを想像できるだろうし、それによって職業意識も異なることが予想される⁶。本節の分析を読み解く際には、それが2011年時点で東京都内に住む1981年～1991年生まれの者であることに留意する必要がある。

第2節 第3回調査の分析——2011年20歳代の職業意識

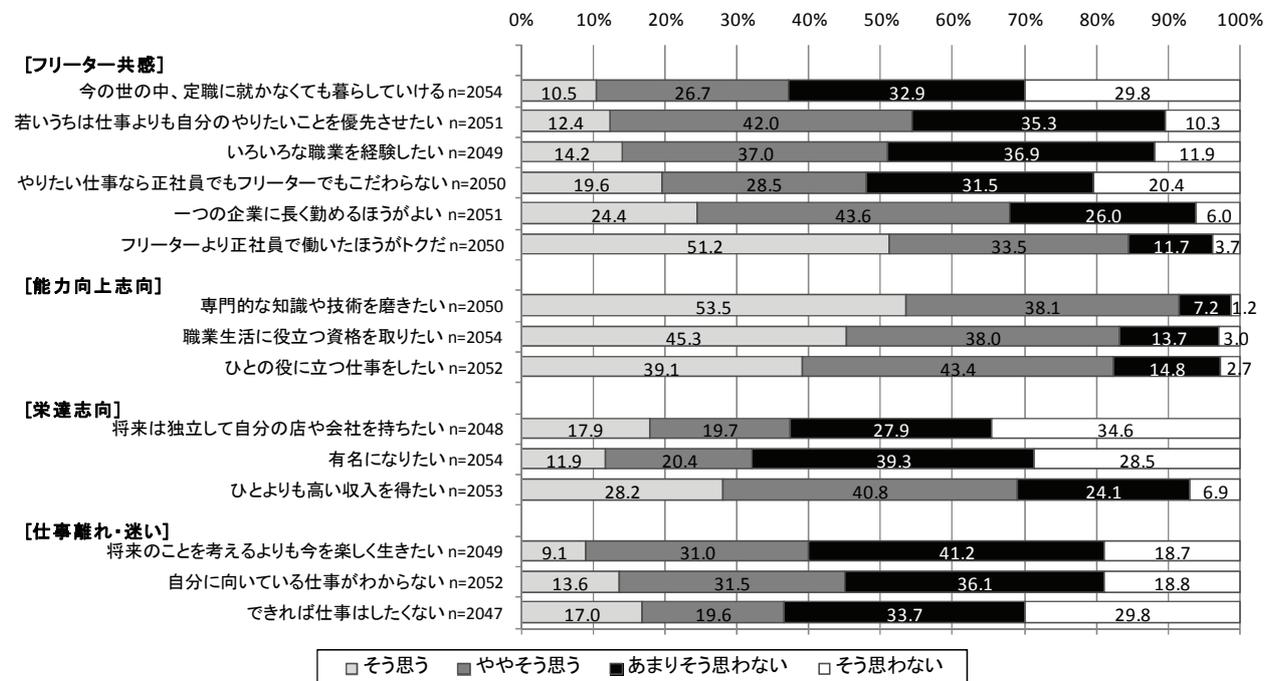
本節では、前節で説明した諸変数のうち、性別、年齢層、現在の雇用形態、学歴、キャリア類型、家族形態ごとに、第3回調査における職業意識の質問についての回答がどのように差があるのか（あるいはないのか）という点を検討する。

図表3-1は、第3回調査の調査対象全体の職業意識の分布である。「フリーター共感」の各項目について、8割以上が正社員で働いた方が得だと考え、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」は5割を、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」は4割を、その支持が下回っている。仮に経済的な不利や就労の不安的さと、フリーターに象徴される働き方の自由さが天秤にかけられるとして、後者が支持されるとは言いがたい。専門的な知識や技術を磨くことへの支持が9割を、資格取得への支持も8割を超えており、能力向上への賛成は広く20歳代の若者に共有されている。「栄達志向」に関して、「ひとよりも高い収入を得たい」という経済的な向上への支持は7割弱存在するものの、独立や有名になることに対する支持は、全体の4割を下回っている。仕事離れ（「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」「できれば仕事をしたくない」）については全体の3～4割で分布しているものの、4割を超えた者が「自分に向いている仕事はわから

⁶ 東京圏以外の若者の職業意識を分析したものとして、例えば、仙台圏の高校生の進路意識・職業意識を分析した片瀬・元治（2008）がある。

ない」としており、就業への一定数の支持がありつつも、自らの仕事についての迷いが存在する現状を確認できる。

図表 3-1 若者の職業意識

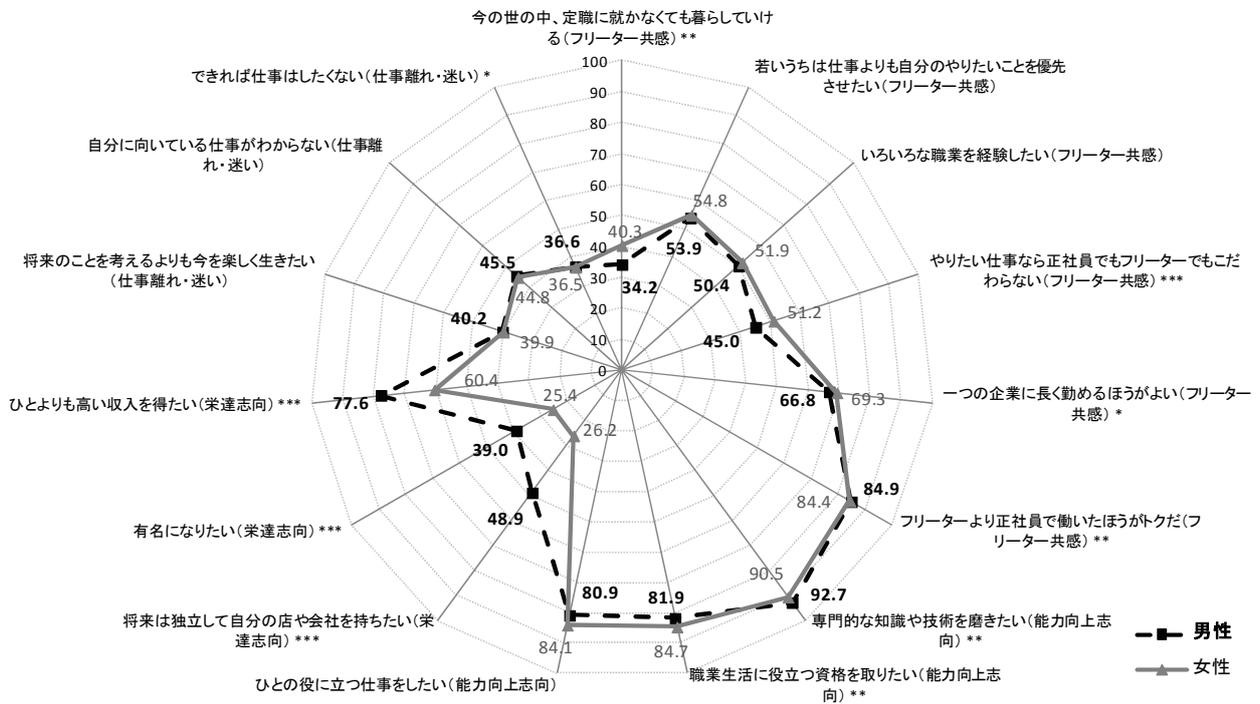


続いて、性別と職業意識の関連を確認する。前節で説明したように、性別あるいはジェンダーは、若年者の就労を考える際に重要な変数である。前述した4種類の職業意識について、第1回調査の分析時（日本労働研究機構 2001: 55）には、男女別の「違いはあまり大きくなく、『栄達志向』のみ男性の方が強いという結果」が出ている。第3回調査においては、どうだろうか。

図表3-2は男女別の職業意識項目に対する肯定回答の分布である。分布で特に違いが目立つのは、「栄達志向」に該当する項目である。男性の方が女性に比して、「栄達志向」への肯定の割合が高い⁷。他には、女性の方が相対的に、ある部分では「フリーター共感」を支持する傾向にある（「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」）一方、「一つの企業に長く勤めるほうがトクだ」「職業生活に役立つ資格を取りたい」といった項目への支持がわずかだが高いという結果になり、安定や堅実といったものも考慮されている。

⁷ これをもって、第1回調査時の結果と同じであるという判断を下すことには、慎重でなければならない。なぜなら、次節でも触れるが、2回の調査では対象者の抽出方法が異なっており、男女それぞれの対象者属性の構成も異なるからである。比較の作業は次節で行うので、ここでの結果はあくまで第3回調査時のものであることに留意する必要がある。

図表 3-2 男女別職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）^{8 9}



性別ごとに職業意識を見ると、項目によって分布に差があるものとほとんどないものが存在するが、こうした違いは、前節で説明した諸変数ごとに見ていくと、結果が異なっているかもしれない（例えば、在学期に近く職業に対する意識が男女でそれほど異ならないと予想される若い年齢層と、性別によって異なる就業環境を経験した後期若年層は、性別ごとに分けて結果を見た際にその違いが明示される、など）。よって、以降の分析では、各カテゴリー内での職業意識を男女別に把握していく。

1. 年齢層：20歳代前半層、20歳代後半層

図表 3-3 は、男性の年齢層別の職業意識の分布である。 χ^2 検定（有意水準 5%）で年齢層と質問項目の関連を確認したところ、「フリーターよりも正社員で働いたほうがトクだ」と「専門的な知識や技術を磨きたい」で有意な関連が認められた¹⁰。両者とも、20歳

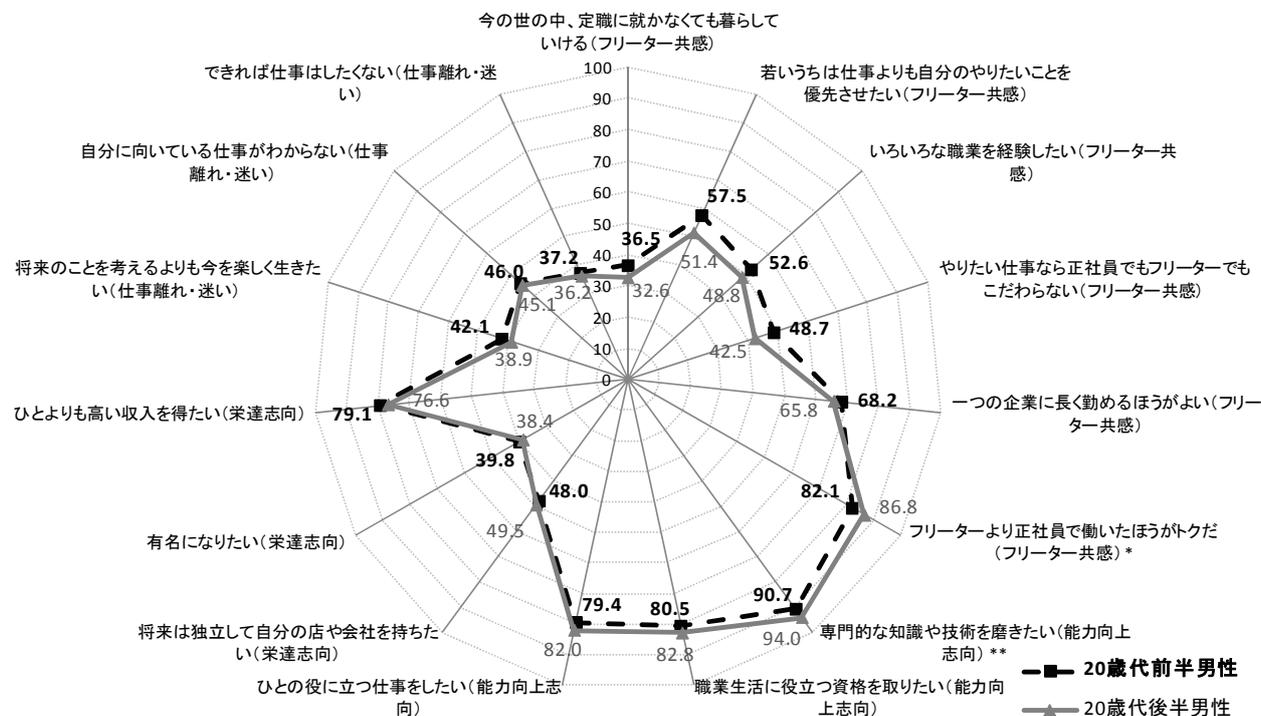
⁸ 本章のほとんどの図表において有効ケース数の記載を省略しているが、章末の付表に必要なものをまとめて示しているの、適宜参照していただきたい（図表 3-2 の男性・女性に関しては、20歳代前半と 20歳代後半を足したものがそれぞれの有効ケースになる）。なお、本章で提示する数値は、小数点第 2 位を四捨五入し、小数点第 1 位までを記載したものである。

⁹ 図表 3-2～図表 3-14 の各項目の最後に、参考として、 χ^2 検定（有意水準 5%）で統計的独立を確認した結果を示した（帰無仮説は「2 変数が独立である」）。なお、検定結果（* p<.05 ** p<.01 *** p<.001）は四件法で行ったものであり、無記載は、関連が認められなかった場合か、期待度数 5 未満のセルが全体の 20% 以上のため検定を行っていない場合である。

¹⁰ 前者は 5% 水準（df=3、 $\chi^2=10.2$ ）、後者は 1% 水準（df=3、 $\chi^2=12.7$ ）の有意差。なお、質問紙上では四件法で尋ねているので、検定も四件法のまま行った。

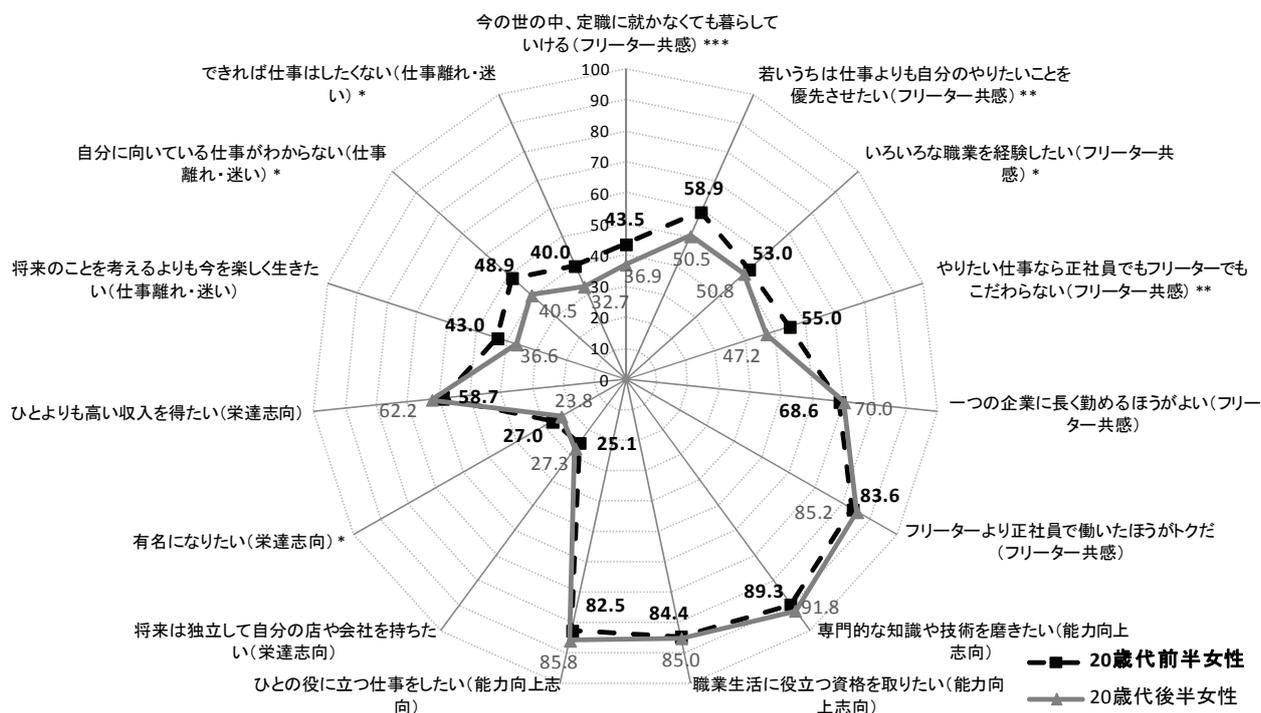
代前半層よりも20歳代後半層の方が肯定回答の割合が高い。正社員志向や能力向上に関して、年長層の方が支持しているという傾向を確認できる。しかし、それ以外の項目に関しては、20歳代前半層と20歳代後半層で、際立った違いは認められない。

図表3-3 年齢層別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



一方、女性は男性とは状況が異なる。図表3-4は、女性の年齢層別の職業意識の分布である。「フリーター共感」に該当する6項目のうち、4項目（「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」）において、20歳代後半層よりも20歳代前半層の方が肯定回答の割合が高い。20歳代後半層の女性に比べて、20歳代前半層の女性は、典型的な就労行動に縛られないフリーターのようなあり方への支持・共感が存在しているようだ。他にも、「仕事離れ・迷い」の2項目（「自分に向いている仕事かわからない」「できれば仕事はしたくない」）や「有名になりたい」も、20歳代前半層の方が、肯定回答の割合が高い。

図表 3-4 年齢層別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



以上から、年齢段階の効果かコーホートの違いかは判別できないが、女性の方が男性に比して、職業意識に対する年齢の効果が存在すると言することができる。

2. 雇用形態：正規雇用、派遣・契約、アルバイト・パート、無業・その他

ここでは、男女それぞれにおいて、現在の雇用形態で職業意識の分布がどのように異なるのか（もしくは異なるのか）を見ていく^{11 12}。

図表 3-5 は、男性の雇用形態別の職業意識の分布である。

正規雇用の男性は、「フリーター共感」への支持が低く、また「能力向上志向」全般や「栄達志向」（「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」）の肯定が高い。この点で、堅実かつ安定的な意識ではあるが、迷いがないわけではない。「仕事離れ・迷い」の項目が4形態中で最も低い結果にはなっていない。

これに対し、派遣・契約の男性は、「仕事離れ・迷い」に該当する3項目全てにおいて、肯定回答の割合が最も低い。また、「フリーター共感」への支持も比較的高く、「能力向上志向」のうち「職業生活に役立つ資格を取りたい」と「ひとの役に立つ仕事をしたい」への肯定が最も低い。自分の働き方に対するビジョンを明確にもちつつ、既存の働き方や制度から自由な志向をもっているのが、派遣・契約の男性であると言えるかもしれない。

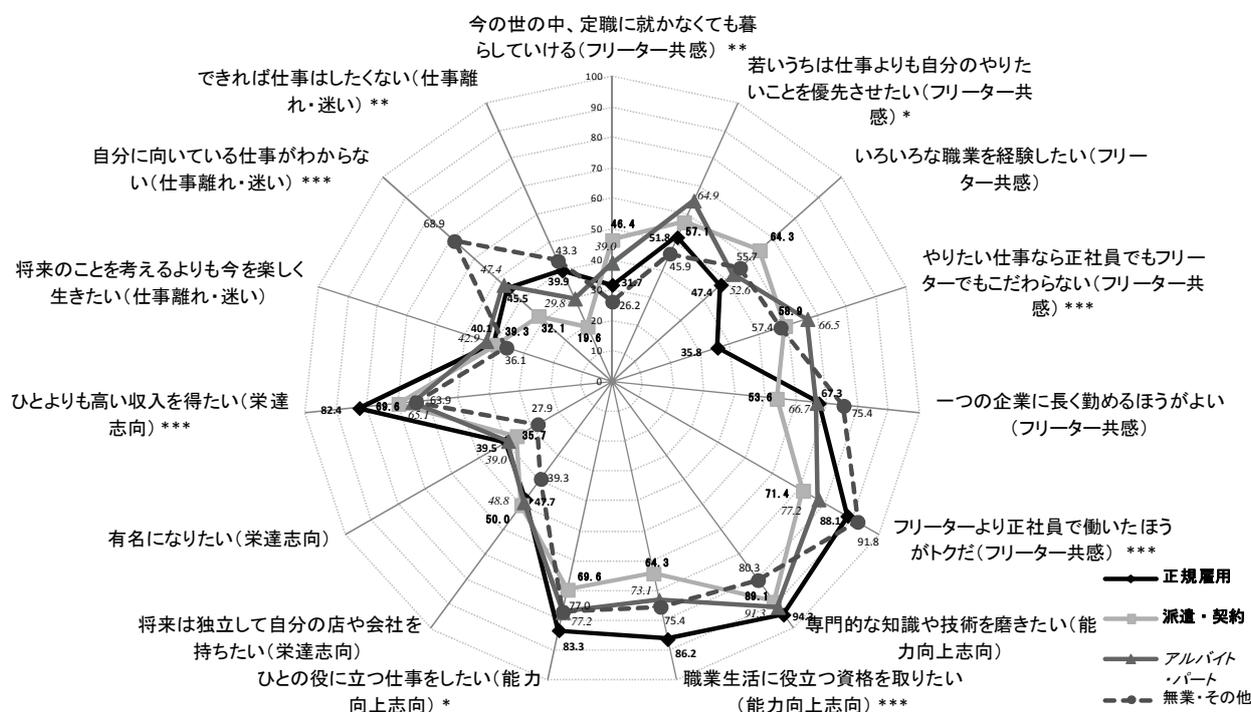
¹¹ なお、自営・家業に該当するケースは、そこに含まれる業種が多岐にわたることが予想され、職業意識に一定の傾向を見出すのは難しいと判断した。よって、本章では記載しない。

¹² 派遣・契約および無業・その他の男性と無業・その他の女性はケース数が100に満たないので、その点は留意する必要がある。

アルバイト・パートの男性は、「若いうちは仕事よりやりたいことを優先したい」や「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」の肯定回答の割合が最も高い。

無業・その他の男性は、「フリーター共感」への支持が低く、「栄達志向」への肯定回答の割合も低い。そして、「仕事離れ・迷い」の項目のうち、「できれば仕事はしたくない」「自分に向いている仕事が見つからない」に対する肯定回答の割合が最も高いが、「将来のことを考えるより今を楽しく生きたい」に対する肯定回答の割合は最も低い。ここから、刹那的な生き方や自由な働き方を肯定しておらず、迷いのなかで、できれば仕事はしたくないという意識をもつ無業・その他の男性の姿が見えてくる。

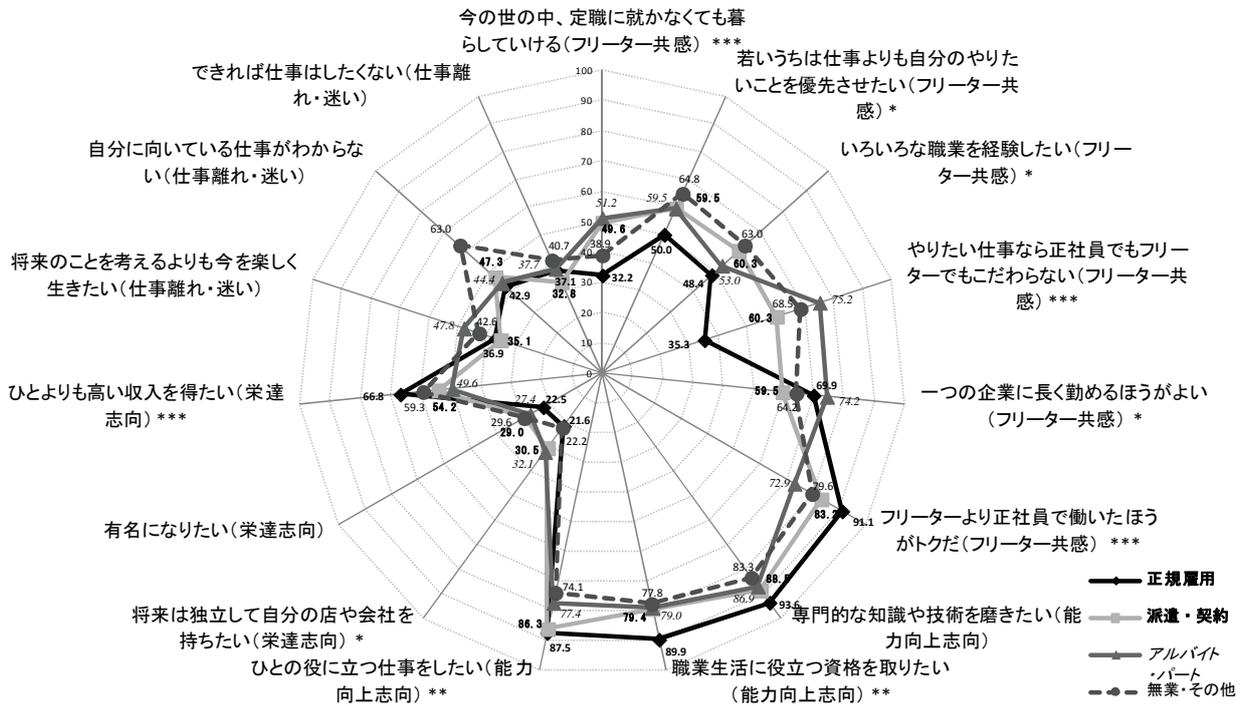
図表 3-5 雇用形態別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



正規雇用の女性（図表 3-6）は、男性と同様に「フリーター共感」への支持が低く、その傾向は男性より顕著に見える。また、「能力向上志向」や、「栄達志向」のうち「ひとよりも高い収入を得たい」に対する肯定回答の割合が最も高く、「有名になりたい」に対する肯定回答の割合が最も低い。安定的な雇用を支持する堅実な志向が見て取れる。

だが、派遣・契約とアルバイト・パートにおいては、男性とは異なった傾向が見られる。まず、派遣・契約の女性の「能力向上志向」や「仕事離れ・迷い」の項目に対する肯定回答の割合は、他の雇用形態に比べて低いとは言い切れない。この点が、派遣・契約の男性とは異なる。

図表 3-6 雇用形態別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



また、アルバイト・パートの女性において、「フリーター共感」の4項目で他の雇用形態よりも共感を示す回答となっている。

無業・その他の女性が、「できれば仕事はしたくない」「自分に向いている仕事かわからない」に対する肯定回答の割合が最も高い点は男性と同様だが、「栄達志向」に対する肯定回答が他の雇用形態に比べて低いというわけではない点や、「フリーター共感」に該当する2項目で最もフリーターのような働き方に対する支持がある点が、男性と異なる。

3. 学歴：高卒、専門・短大・高専卒、大卒・大学院卒

ここでは、男女それぞれで、高卒、専門・短大・高専卒、大卒・大学院卒の三つの学歴区分間の職業意識を比較する¹³。

図表 3-7 は、男性の学歴別の職業意識の分布だが、前述した雇用形態ほどには意識の違いが顕著ではない。「フリーター共感」6項目のうち「一つの企業に長く勤めるほうがよ

¹³ 中卒・高校中退、高等教育中退に関しては、該当ケース数の少なさなどの理由から、比較して説明することが困難だと判断したので、以下に数値のみを記す。

	中卒、高校中退(男性)	高等教育中退(男性)	中卒、高校中退(女性)	高等教育中退(女性)		中卒、高校中退(男性)	高等教育中退(男性)	中卒、高校中退(女性)	高等教育中退(女性)
この世の中、定職に就かなくても暮らしていける	33.9	41.1	50.0	53.3	将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	57.1	57.5	29.4	33.3
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	60.0	64.4	47.1	71.1	有名になりたい	32.1	37.0	29.4	15.6
いろいろな職業を経験したい	56.4	50.7	58.8	52.3	ひとよりも高い収入を得たい	75.0	71.2	47.1	48.9
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	50.0	54.8	79.4	64.4	将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	33.9	35.6	47.1	42.2
一つの企業に長く勤めるほうがよい	70.9	72.2	82.4	62.2	自分に向いている仕事かわからない	46.4	50.0	44.1	57.8
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	85.7	83.6	55.9	71.1	できれば仕事はしたくない	32.1	46.6	44.1	35.6
専門的な知識や技術を磨きたい	87.5	94.5	76.5	86.7					
職業生活に役立つ資格を取りたい	75.0	84.9	79.4	68.9					
ひとの役に立つ仕事をしたい	69.6	78.1	84.8	64.4					

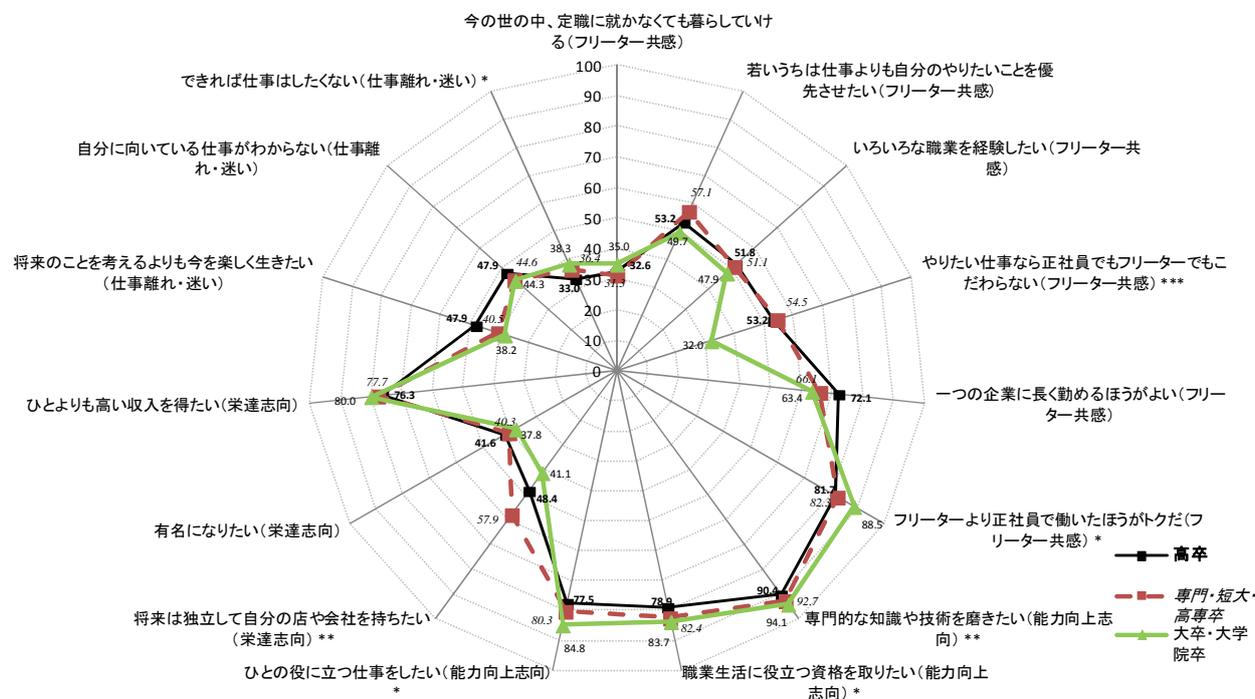
注) 数値は、「そう思う」＋「ややそう思う」の全体に対する％

い」以外の5項目において、大卒・大学院卒の者が、最もフリーターのような働き方を支持していない。特に、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」に対する肯定回答の低さや「フリーターよりも正社員で働いたほうが得だ」に対する肯定回答の高さが目立ち、正社員志向の高さがうかがえる。また、大卒・大学院卒の男性は、「能力向上志向」3項目や「ひとよりも高い収入を得たい」に対する肯定が最も高い。その一方で、「できれば仕事はしたくない」に対する肯定回答が最も高く、職業世界からの離脱志向も垣間見える。

専門・短大・高専卒の男性は、「若いうちは仕事よりもやりたいことを優先させたい」、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」に対する肯定回答の割合が、他の学歴の者に比べて高い。

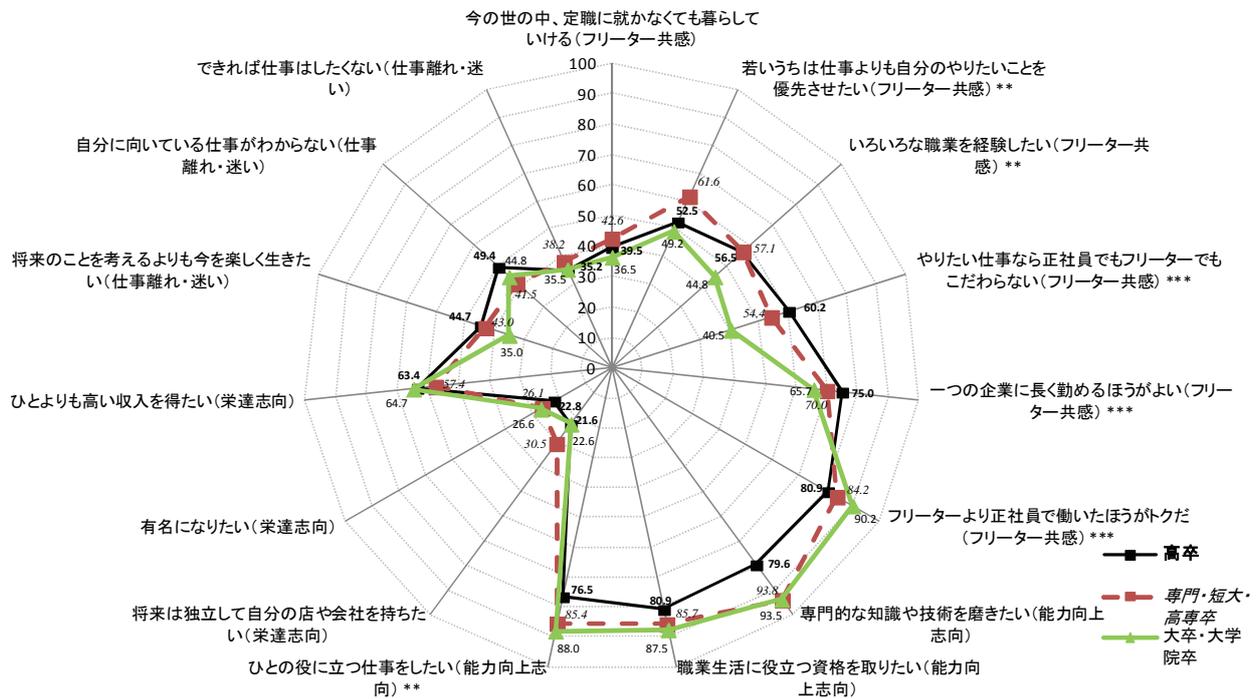
高卒の男性は、「仕事離れ・迷い」のうち、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」や「自分に向いている仕事かわからない」に対する肯定回答の割合が他の学歴の者に比べて高い一方で、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」に対する肯定回答の割合が最も高く、「できれば仕事はしたくない」に対する肯定回答の割合が最も低い。このことから、流動的ではない安定的な職業環境で真面目に働く志向をもっている高卒の男性像が見て取れる¹⁴。

図表3-7 学歴別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



¹⁴ 一般的に学歴別の離職に関して、学歴が低いほど離職率が高いという説明がされる（いわゆる「七五三現象」）が、ここでの結果は、そうした離職率という指標が示す「実態」と、若者自身の「意識」のずれを示していると言えるかもしれない。

図表 3-8 学歴別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



対して、学歴別で女性の職業意識を見たときには（図表 3-8）、全般的には男性と似た傾向（大卒・大学院卒の者の堅実さや「能力向上志向」の高さなど）にあるものの、「フリーター共感」に該当する項目において、高卒女性と専門・短大・高専卒の女性との意識の違いが見られるものがある。例えば、「若いうちは仕事よりもやりたいことを優先したい」や「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」において、男性よりも両者の肯定回答の割合の差が目立つ。また女性は、「能力向上志向」の項目でも、高卒の者が肯定回答の割合が低い。また男性に比べて、「栄達志向」の項目は全般的に肯定回答が低い。

4. キャリア類型：正社員定着、非典型一貫、他形態から正社員、正社員転職

ここでは、第 1 章第 3 節 5. で作成されたキャリア類型のうち、一定のケース数（全体の 10%以上）が確保できる「正社員定着」「非典型一貫」「他形態から正社員」の 3 つと「正社員転職」の計 4 つの類型間の職業意識を見ていく。

図表 3-9 は、男性のキャリア類型別の職業意識の分布である。

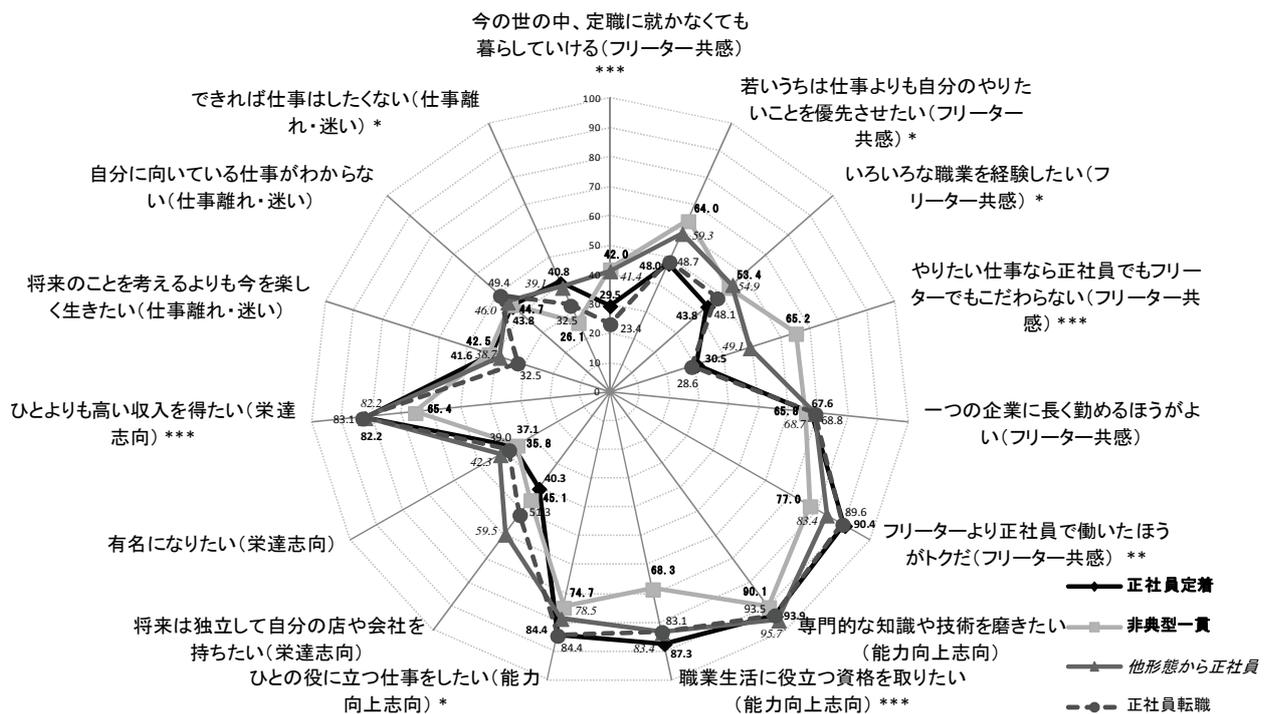
非典型一貫のキャリアの男性は、「フリーター共感」への支持が高く、「能力向上志向」の 3 項目に対する肯定回答の割合が最も低い。また、「栄達志向」の項目のうち「有名になりたい」と「ひとよりも高い収入を得たい」の肯定回答の割合が最も低く、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」に対する肯定回答の割合も 2 番目に低い。フリーターのような働き方への共感の高さ、能力向上意識や職業アスピレーションの低さが非典型一貫のキャリアの男性の特徴であるものの、「できれば仕事はしたくない」に対する肯定回答の割

合は最も低い。

他形態から正社員へ移行したキャリアの男性は、「能力向上志向」の項目において、その肯定回答の割合が非典型一貫の男性より正社員定着や正社員転職の男性に近いが、「フリーター共感」の項目においては必ずしもそうとは言えない。また、「栄達志向」の項目のうち、日本労働研究機構（2001: 91-93）が「夢追求型」フリーターに特徴的であるとした「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」の肯定回答の割合が最も高い。

正社員転職型の男性は、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に対する肯定回答の割合が最も低く、「ひとの役に立つ仕事をしたい」、「ひとよりも高い収入を得たい」、「自分に向いている仕事がわからない」に対する肯定回答の割合が最も高い。

図表 3-9 キャリア類型別男性の職業意識の分布
 （「そう思う」＋「ややそう思う」の％）

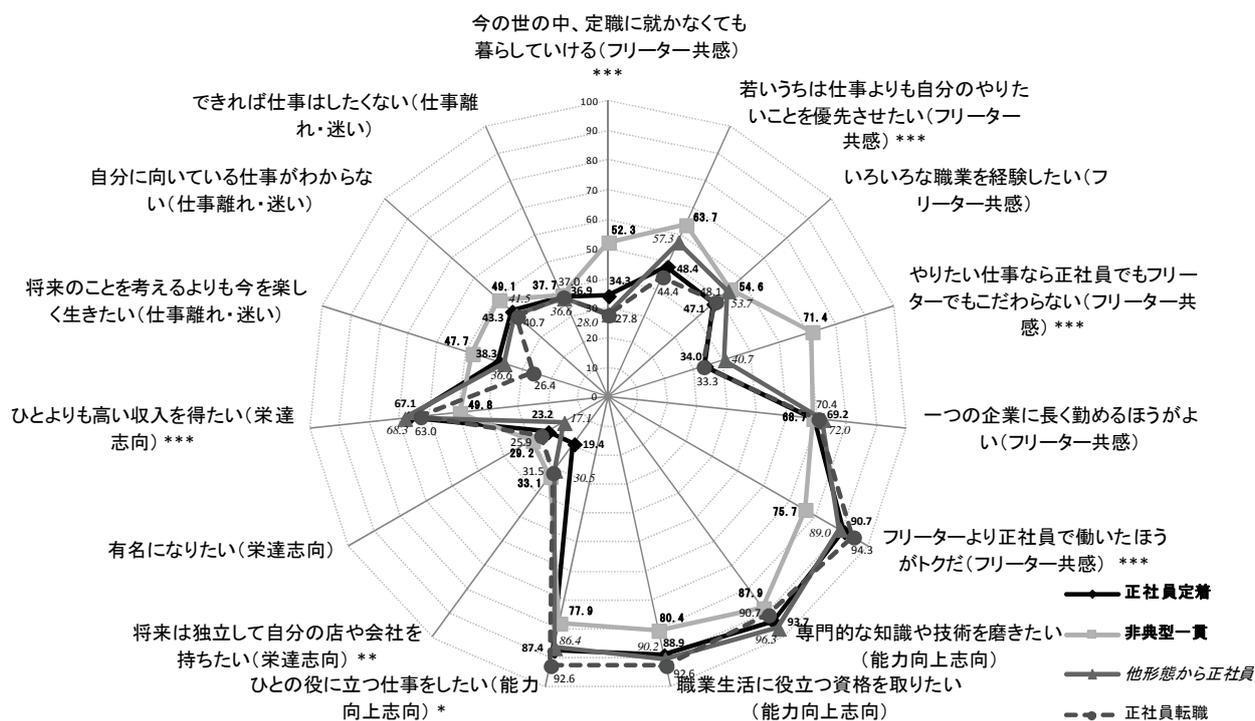


女性のキャリア類型別の職業意識の分布を見ると（図表 3-10）、男性と同様に、非典型一貫のキャリアの女性は、「フリーター共感」への支持が高く（特に、他のキャリア類型に比較して、「今世の中、定職に就かなくても暮らしていける」と「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」の肯定回答の割合が高い）、「能力向上志向」の 3 項目に対する肯定回答の割合が最も低い。男性と異なるのは、「仕事離れ・迷い」の 3 項目

全てにおいて肯定回答の割合が最も低く、「栄達志向」のうち「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」の肯定回答の割合が最も高いという点である。

正社員転職型の女性においては、「ひとの役に立つ仕事をしたい」が最も肯定回答の割合が高い点は男性と同様だが、「自分に向いている仕事かわからない」が最も肯定回答の割合が低い点は男性と対照的である。

図表 3-10 キャリア類型別女性の職業意識の分布
(「そう思う」+「ややそう思う」の%)



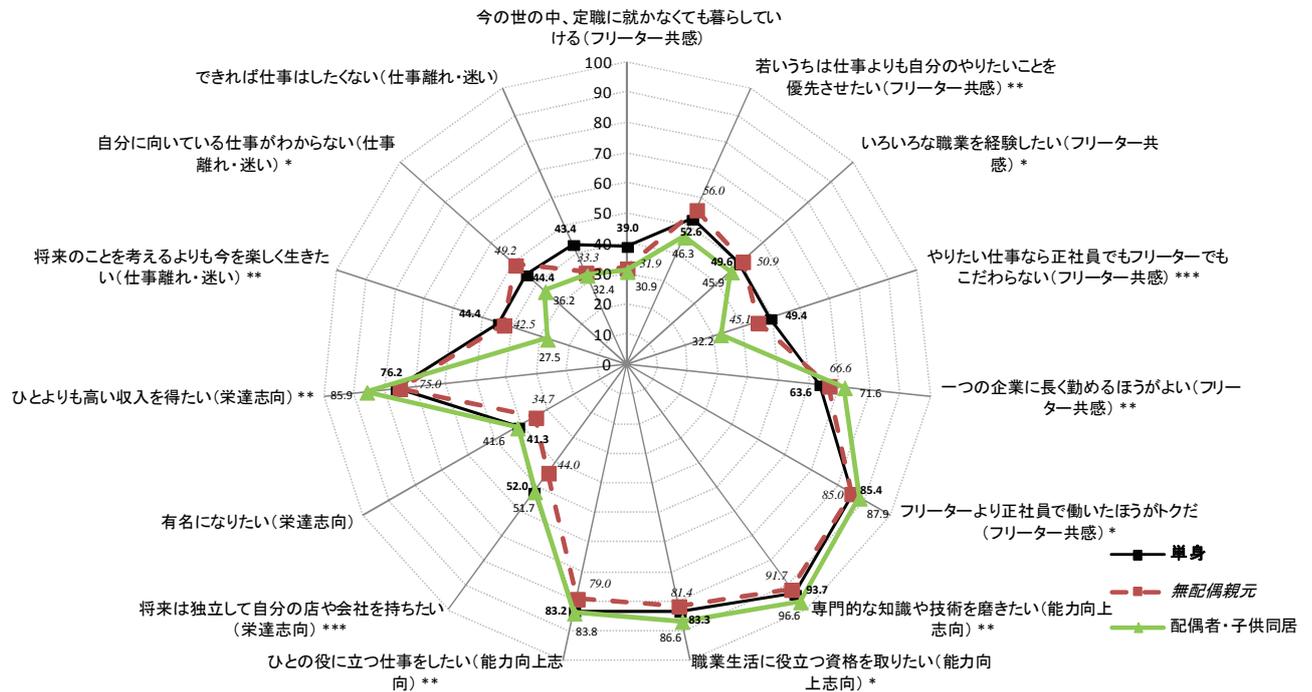
5. 家族形態：単身、無配偶・親元、配偶者・子供同居

家族形態は、前節で説明したとおり、個人の職業意識や就業行動を規定する重要な変数だと考えられる。ここでは、第1章第5節2.)で使用した家族形態の種類のうち、「その他」を除いた「単身」「無配偶・親元」「配偶者・子供同居」別の分布を比較し、職業意識の特徴を検討する¹⁵。

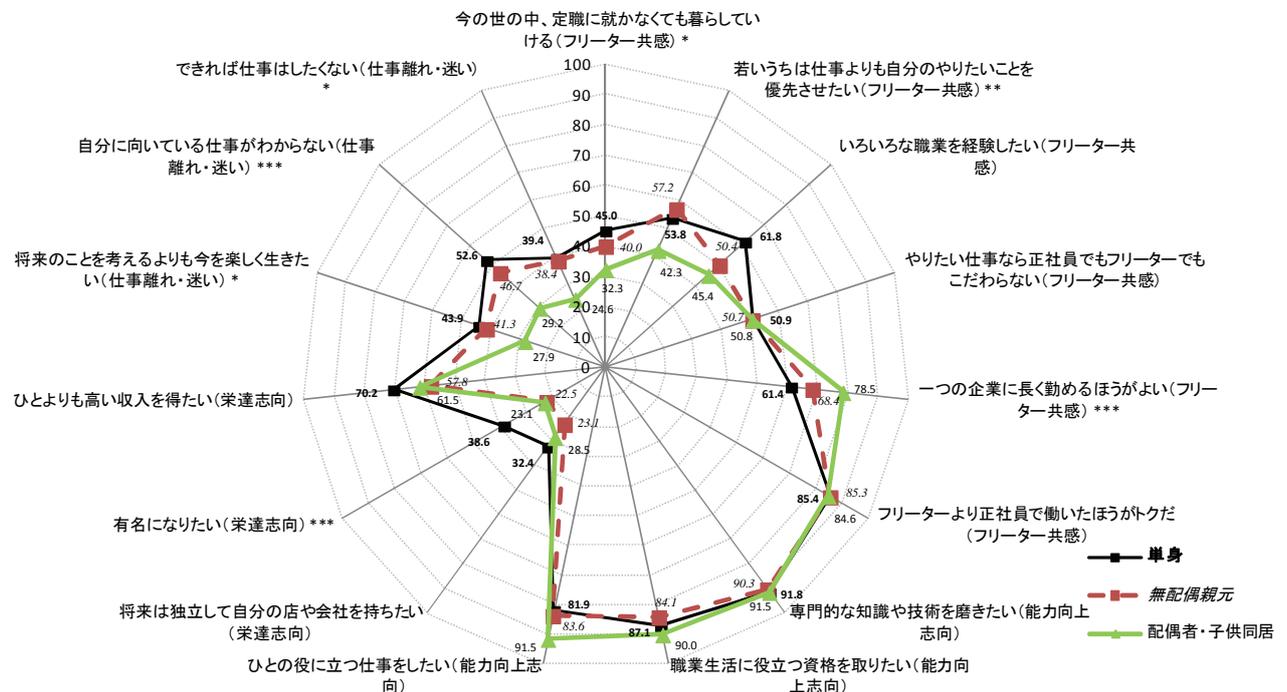
図表 3-11 は、家族形態別の男性の職業意識の分布である。家族形態による意識の分布の違いは全体的には大きくないが、配偶者・子供同居の者は、「フリーター共感」や「仕事離れ・迷い」に該当する項目への肯定が相対的に低く、無配偶・親元の者は、「栄達志向」に該当する項目への肯定が相対的に低い。

¹⁵ なお、男女ともに20歳代前半と20歳代後半に分けて結果を確認したが、その際には、20歳代前半の配偶者・子供同居が他の2つに比べて、かなり特殊な分布になっていた。しかし、これにはケース数の少なさ(男性24ケース、女性35ケース)が少なからず影響していると考えられるため、ここでの説明は省略することにした。

図表 3-1-1 家族形態別男性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



図表 3-1-2 家族形態別女性の職業意識の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



対して女性は、男性よりも家族形態による違いが顕著である。図表 3-1-2 が示すとおり、女性においても、配偶者・子供同居の者が「フリーター共感」や「仕事離れ・迷い」に該当する項目への肯定が相対的に低い、男性よりも結果の開きが大きい。また、配偶

者・子供同居の者が、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」や「ひとの役に立つ仕事をしたい」への肯定回答の割合が高いのも特徴的である。さらに女性の分布で特徴的なのは、単身の者が、他の2つの家族形態の者と異なった分布を示す項目があるという点である。例えば、「いろいろな職業を経験したい」「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」等である。「仕事離れ・迷い」に該当する項目や他の安定性に関わる項目に関しては配偶者・子供同居の者が、「栄達志向」に該当する項目や新しい可能性へのチャレンジに関する項目に関しては単身の者が、他の2つの家族形態の者とは異なった職業意識をもっているというのが20歳代女性の特徴である。

6. 第3回調査新設項目：対人関係、一般的信頼感、政治的有効感覚

第3回調査では、第1回調査で用いた15個の職業意識項目に、新たに3つの項目を加えた。まず、近年の労働場面では対人スキルの重要性が高まっていることと、友人関係が若者にとってますます重要なものになっていることがしばしば指摘されるので、こうした実態を把握するために「誰とでもすぐに仲良くなれる」という対人関係に対する自己評価の項目を設置した。

また、日本社会では若年層の労働に関わる政治的関心や参加・連帯が十分ではないと言われるが、そうした局面を理解するために、連帯の基礎となるための信頼の程度の項目として「ほとんどの人は信頼できる」を、政府が行う政治に対する有効感覚の項目として「自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない」を、設置した¹⁶。

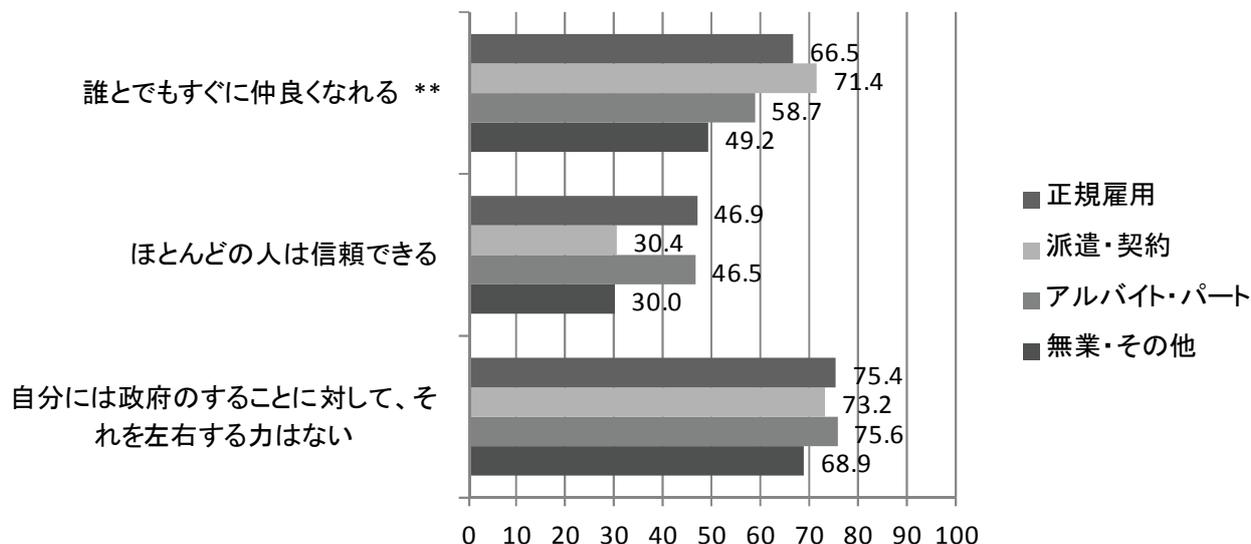
以下、これらの新設項目の分布を男女別に確認する。本節で扱った各カテゴリーのうち、雇用形態ごとで見た際に、分布にその特徴が特に表れていると判断したため、雇用形態別の結果を示す。

男性（図表3-13）は、無業・その他の状態にある者が政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目に対する肯定が低く、また、派遣・契約と無業・その他の者が一般的信頼感の項目に対する肯定が低い。

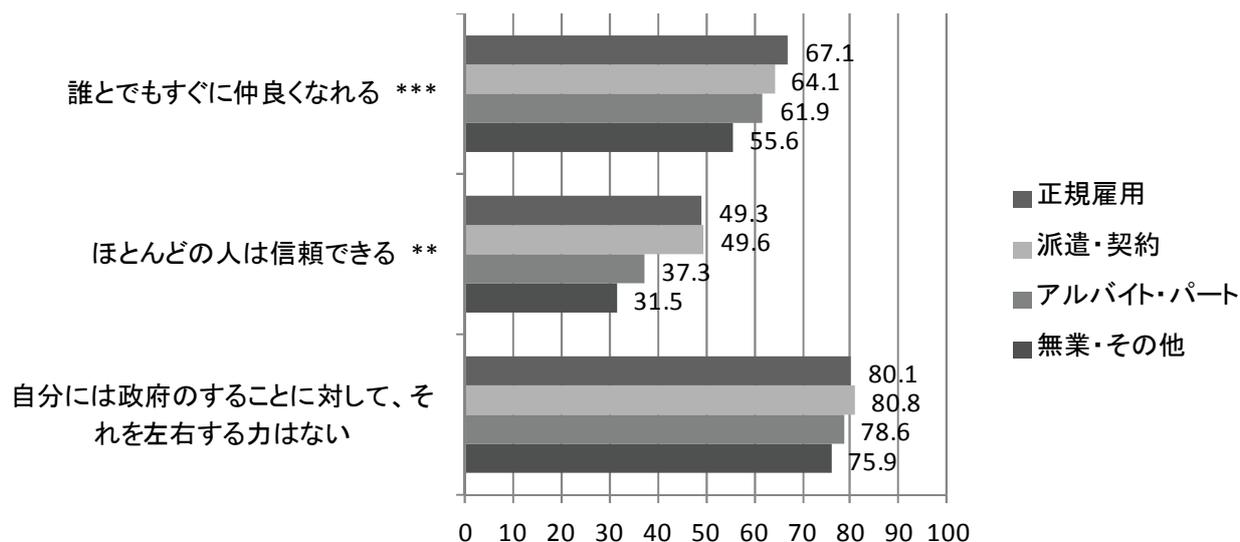
一方女性（図表3-14）は、政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目については男性とほぼ同様の傾向を示すが、一般的信頼感の項目については、派遣・契約の者の肯定回答の割合が最も高い。

¹⁶ 第1章第5節6. で分析した社会的問題に関する設問も、同様の関心から設置した。なお、3項目の設置に際しては、青年文化研究会が2007年に実施した調査（2006～2008年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)「若者の中間集团的諸活動における新しい市民的参加の形」）を参考にした。

図表 3-13 男性の第3回調査新設項目の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



図表 3-14 女性の第3回調査新設項目の分布（「そう思う」＋「ややそう思う」の％）



第3節 職業意識の2時点比較——2001年20歳代と2011年20歳代

本節では、前節でとりあげた15項目の職業意識について、第1回調査（2001年）と第3回調査（2011年）の2時点で比較を行う¹⁷。まず、1. で2時点における正規雇用と非典型雇用の回答分布を確認し、傾向を概観する。続いて2.～5. では、各項目の回答を得点化（「そう思う」を2点、「ややそう思う」を1点、「あまりそう思わない」を-1点、「そう思わない」を-2点として、相加平均を算出したものを「得点」とする）し、「フリーター共感」「能力向上志向」「栄達志向」「仕事離れ・迷い」の4つの傾向が、2時点間でどのように異なるかを把握していく。

¹⁷ 第2回調査では職業意識について尋ねていないため、3時点の比較はできない。

なお、前節で確認した諸変数のうち、現在の雇用形態、学歴、家族形態について検討するが、第1回調査と第3回調査では調査対象者の抽出方法が異なる¹⁸等の理由から、時点間での直接的な比較の作業は、各カテゴリー内で行っている。

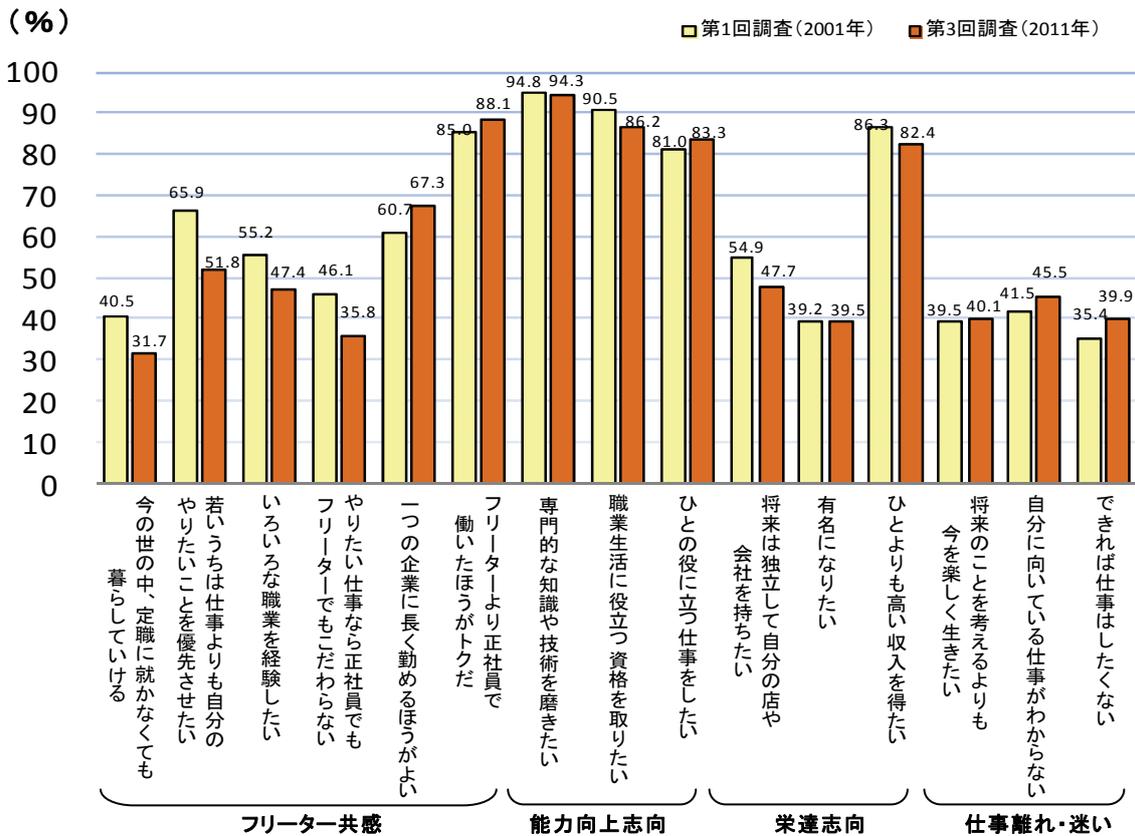
1. 2時点の回答分布の概観（正規雇用と非典型雇用）

詳細な比較に先立って、2時点での回答分布を概観しておきたい。紙幅の都合上、ここでは、正規雇用と非典型雇用についてのみ説明する。図表3-15～図表3-18は、男女それぞれの正規雇用と非典型雇用（「派遣・契約」＋「アルバイト・パート」）の肯定回答（「そう思う」＋「ややそう思う」）の割合である。

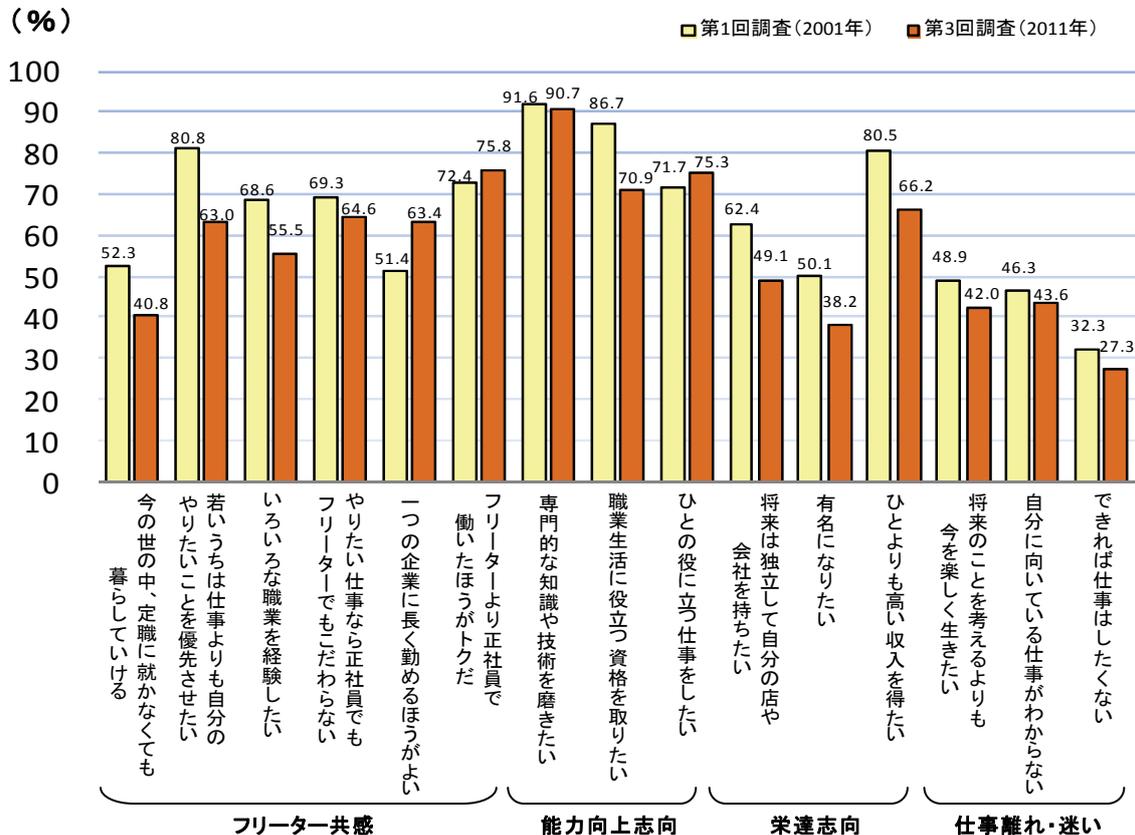
図表3-15～図表3-18いずれにおいても、第3回調査の方がフリーター的な働き方について支持する割合が低い。「能力向上志向」に関しては、男女とも正規雇用では2回の調査で大きな違いはないが、非典型雇用では、第3回調査の方が資格取得への肯定回答の割合が低い（特に図表3-16の男性の非典型雇用では、第1回調査では86.7%だったのに対し、第3回調査では70.9%になっている）。「栄達志向」に関しては、男性の非典型雇用で3項目とも、女性の非典型雇用で「ひとよりも高い収入を得たい」が、第3回調査の方が特に肯定回答の割合が低い。「仕事離れ・迷い」に関しては、男性は、正規雇用が3項目とも第3回調査の方が肯定回答の割合が高く、非典型雇用が3項目とも低い。女性は、正規雇用と非典型雇用ともに、第3回調査の方が「できれば仕事はしたくない」の肯定回答の割合が高い。

¹⁸ 第1回調査では、18～29歳を対象とし、フリーターとフリーター以外（区別は回答者の自己認識による）をそれぞれ1000標本（計2000標本）集めている。詳しくは、序章および日本労働研究機構（2001: 10-12）を参照。なお、本節の分析で第1回調査のデータを使用する際には、18～19歳および学生・主婦は除外した。

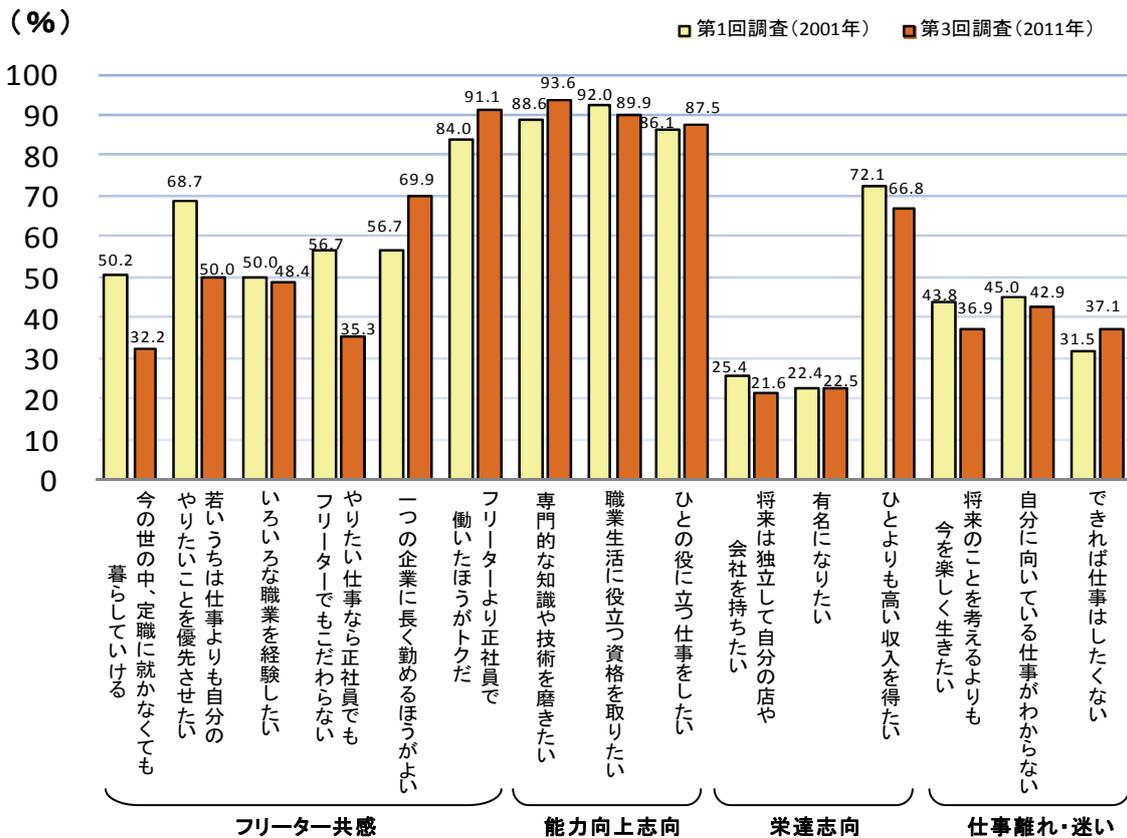
図表3-15 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代男性・正規雇用)



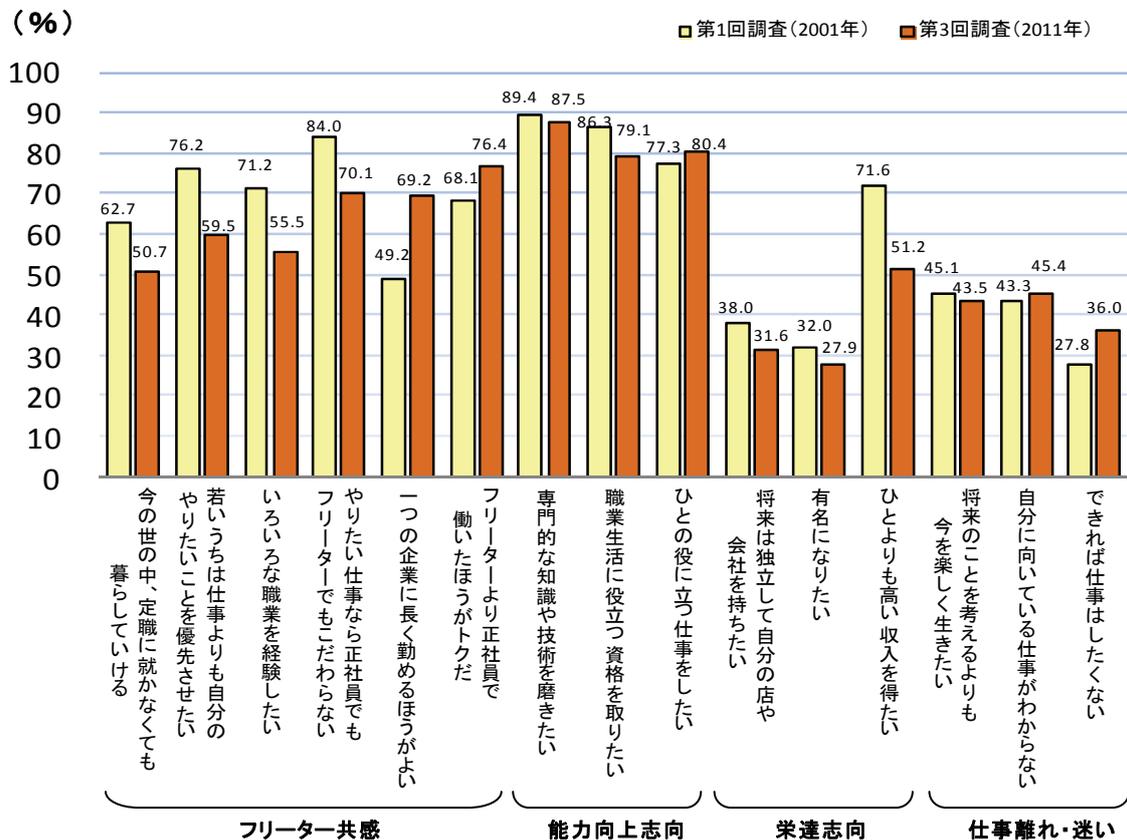
図表3-16 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代男性・非典型雇用)



図表3-17 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代女性・正規雇用)



図表3-18 2時点の職業意識の肯定回答の割合 (20歳代女性・非典型雇用)



2. フリーター共感

図表3-19～3-36は、「フリーター共感」の6項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」の4項目（図表3-19～3-30）は、多くのカテゴリで、第3回調査の方が得点が低い。例えば、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」において（図表3-19～3-21）、第1回調査時には（得点0を中間として考えると）肯定に分布するカテゴリも否定に分布するカテゴリも存在していたが、第3回調査時にはほとんどのカテゴリで否定に回答が分布している¹⁹。

また、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」の2項目（図表3-31～3-36）は、多くのカテゴリで、第3回調査の方が得点が低い。ただし、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」においては、中卒、高校中退の女性（図表3-32）と配偶者・子供同居の男性（図表3-33）が、「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」においては、派遣・契約の男性（図表3-34）と中卒、高校中退の女性（図表3-35）が、第1回調査よりも第3回調査の方が得点が低い。

2時点で特に得点差が大きなものをあげると、「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」における無業・その他の男性（図表3-22、1.06から-0.18へ1.24減少）や単身の男性（図表3-24、0.94から0.12へ0.82減少）、「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」における単身の女性（図表3-30、0.97から0.08へ0.89減少）、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」における無業・その他の男性（図表3-31、-0.14から0.72へ0.86増加）や高等教育中退の男性（図表3-32、-0.12から0.72へ0.84増加）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリ間の意識の差は、全体として、第1回調査時よりも第3回調査の方が小さい²⁰。男性と女性の意識の差に関しては、項目や諸変数によって差が開いたものと縮まったものがあるので、一概に変化を指摘することは難しい。また、雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリ間の意識の差が変化したかという点も一概には指摘しづらいが、しいて言えば、家族形態で意識の差が縮まったと言える。

以上をまとめると、「フリーター共感」の項目について、2時点の間を変化と捉えるならば、やりたいこと志向の減退や安定性を求める志向の高まりを指摘できる。

¹⁹ 例外は女性の高等教育中退（図表3-20）だが、それも0.04である。

²⁰ ただし、学歴別の「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」は、中卒、高校中退の女性が否定の方向に変化している（図表3-35）ので、第3回調査の方が大きい。

雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 アルバイト・パート
- 女性 正規雇用
- 女性 アルバイト・パート
- 男性 派遣・契約
- 女性 派遣・契約
- 男性 無業・その他
- 女性 無業・その他

学歴別

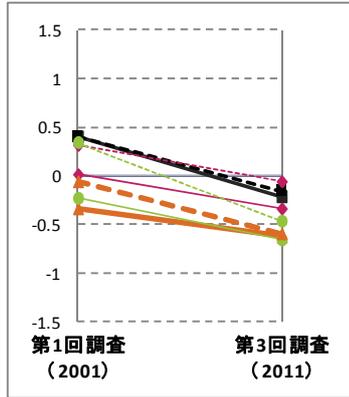
- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒、高校中退
- 女性 中卒、高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

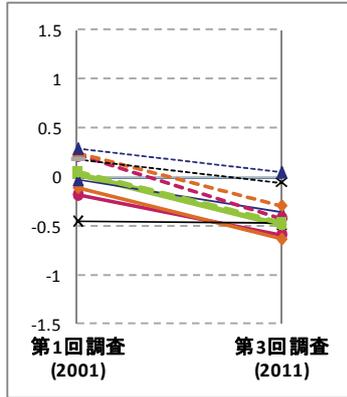
- 男性 単身
- 男性 無配偶・親元
- 女性 単身
- 女性 無配偶・親元
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 配偶者・子供同居

今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける

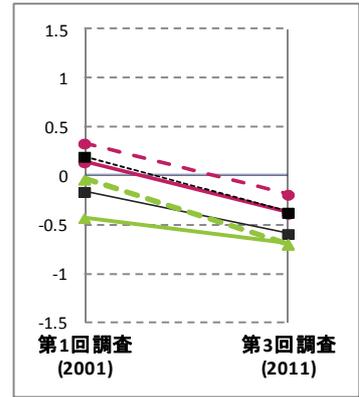
図表 3-19



図表 3-20

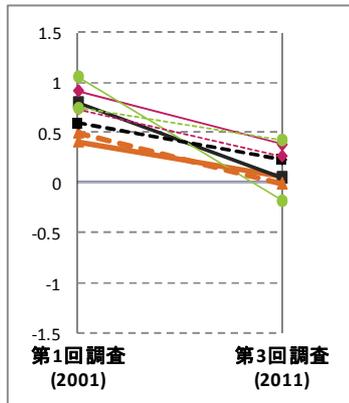


図表 3-21

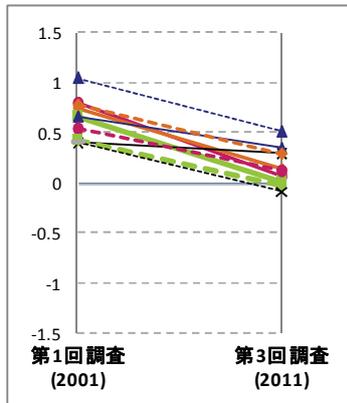


若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい

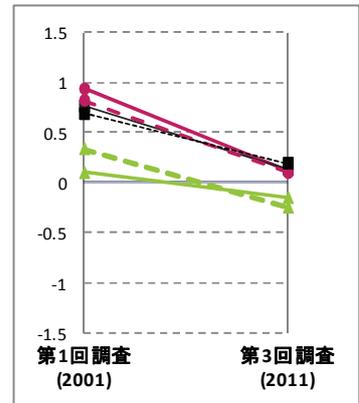
図表 3-22



図表 3-23

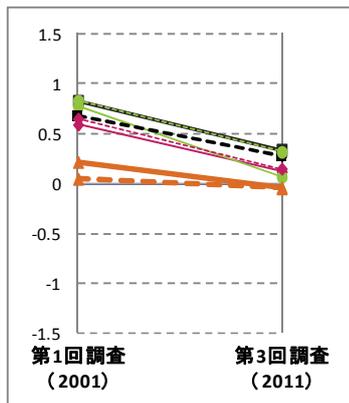


図表 3-24

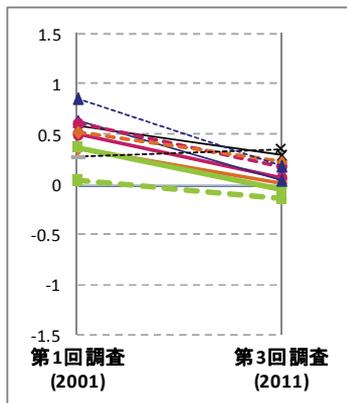


いろいろな職業を経験したい

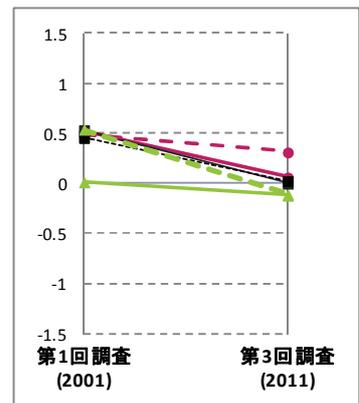
図表 3-25



図表 3-26



図表 3-27



雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 アルバイト・パート
- 女性 正規雇用
- 女性 アルバイト・パート
- 男性 派遣・契約
- 女性 派遣・契約
- 男性 無業・その他
- 女性 無業・その他

学歴別

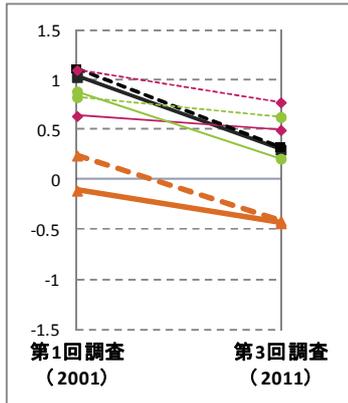
- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒、高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 女性 中卒、高校中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

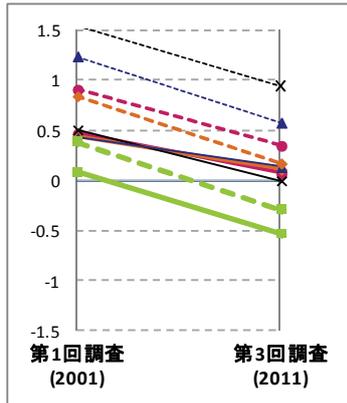
- 男性 単身
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 配偶者・親元
- 女性 配偶者・子供同居

やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない

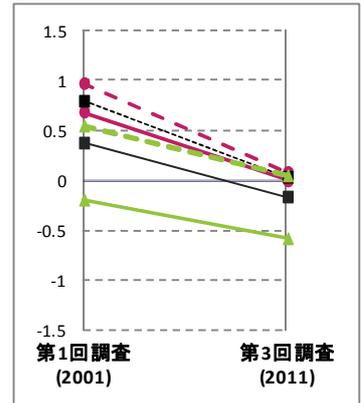
図表 3-28



図表 3-29

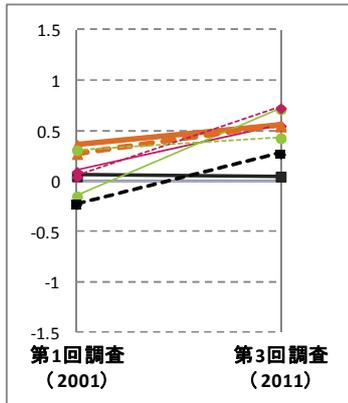


図表 3-30

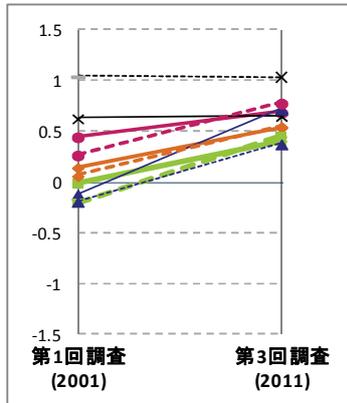


一つの企業に長く勤めるほうがよい

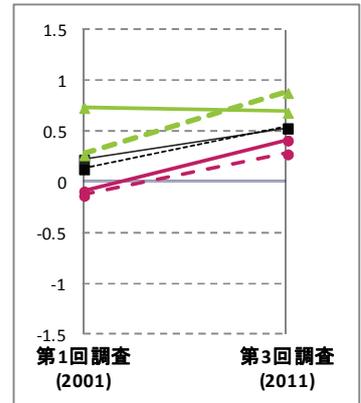
図表 3-31



図表 3-32

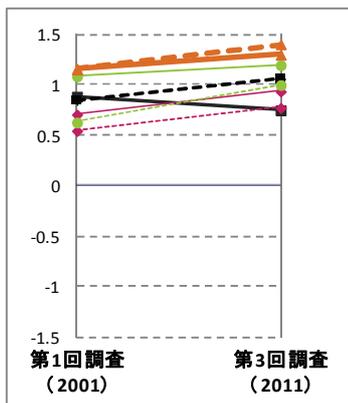


図表 3-33

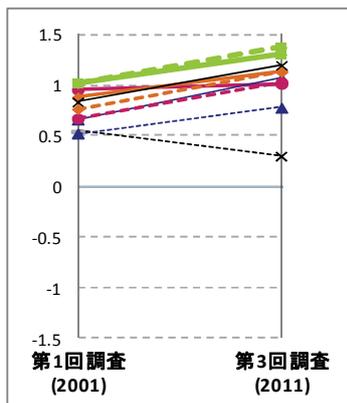


フリーターより正社員で働いたほうがトクだ

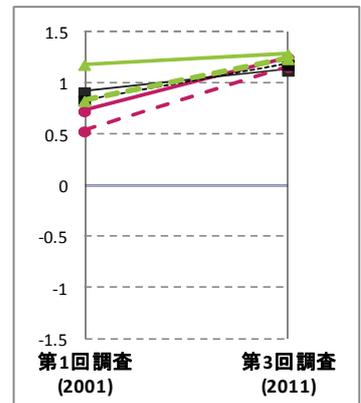
図表 3-34



図表 3-35



図表 3-36



3. 能力向上志向

図表 3-37～3-45 は、「能力向上志向」の 3 項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

例外は多少あるものの、全体的に第 1 回調査よりも第 3 回調査の方が、「専門的な知識や技術を磨きたい」（図表 3-37～3-39）と「職業生活に役立つ資格を取りたい」（図表 3-40～3-42）は得点が低く²¹、「ひとの役に立つ仕事をしたい」（図表 3-43～3-45）は得点が高い傾向にある。ただし、そもそも 3 項目とも両時点で、（0 を中間と考えると）回答は肯定的である。

同時に、こうした全体的な傾向とは逆に変化しているものがあることも指摘しておきたい。例えば、「専門的な知識や技術を磨きたい」における中卒、高校中退の女性（図表 3-38、0.77 から 0.91 へ 0.14 増加）、「職業生活に役立つ資格を取りたい」における高等教育中退の男性（図表 3-41、0.98 から 1.12 へ 0.14 増加）、「ひとの役に立つ仕事をしたい」における中卒、高校中退の男性（図表 3-44、0.78 から 0.61 へ 0.17 減少）、などである。

2 時点で特に得点差が大きなものあげると、「専門的な知識や技術を磨きたい」における無業・その他の男性（図表 3-37、1.54 から 0.98 へ 0.56 減少）、「職業生活に役立つ資格を取りたい」における派遣・契約の男性（図表 3-40、1.00 から 0.45 へ 0.55 減少）、アルバイト・パートの男性（図表 3-40、1.19 から 0.73 へ 0.47 減少）、中卒、高校中退の男性（図表 3-41、1.30 から 0.89 へ 0.41 減少）、高等教育中退の女性（図表 3-41、1.52 から 0.78 へ 0.75 減少）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリ間で、第 1 回調査と第 3 回調査のどちらで意識の差があるかは一概には言い難い。男性と女性の意識の差を比較した際も同様である。雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリ間の意識の差が変化したかという点については、3 つとも大きな変化はないが、「職業生活に役立つ資格を取りたい」において、雇用形態の各カテゴリ間の意識の差が第 1 回調査よりも第 3 回調査の方が大きい（図表 3-40）。

以上をまとめると、「能力向上志向」の項目について、2 時点の間を変化と捉えるならば、専門的な知識・技術の獲得や資格取得を求める志向の若干の減退や、ひとの役に立つ仕事をしたい志向の高まりを指摘できる。

²¹ ただし、「専門的な知識や技術を磨きたい」を家族形態別に見た際には（図表 3-39）、無配偶・親元の男女以外、僅かではあるが、第 1 回調査よりも第 3 回調査の方が、得点が高い。

雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 派遣・契約
- 男性 アルバイト・パート
- 男性 無業・その他
- 女性 正規雇用
- 女性 派遣・契約
- 女性 アルバイト・パート
- 女性 無業・その他

学歴別

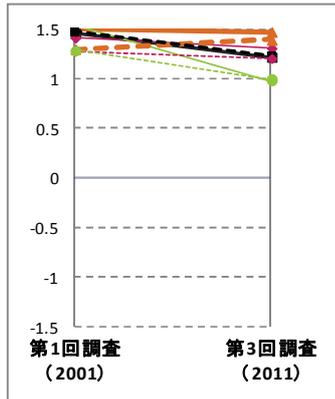
- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒・高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 女性 中卒・高校中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

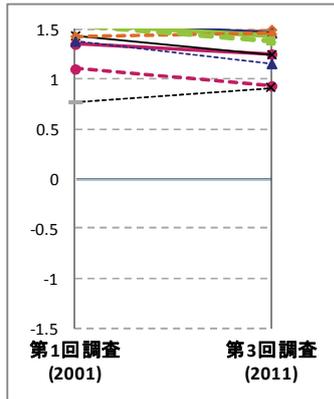
- 男性 単身
- 男性 配偶者・子供同居
- 男性 無配偶・親元
- 女性 単身
- 女性 無配偶・親元
- 女性 配偶者・子供同居

専門的な知識や技術を磨きたい

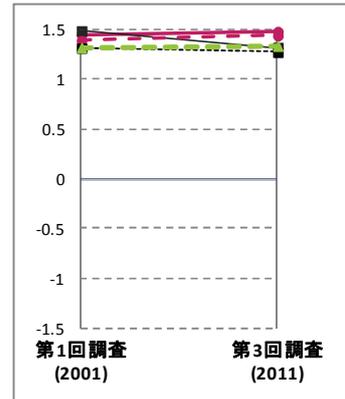
図表 3-37



図表 3-38

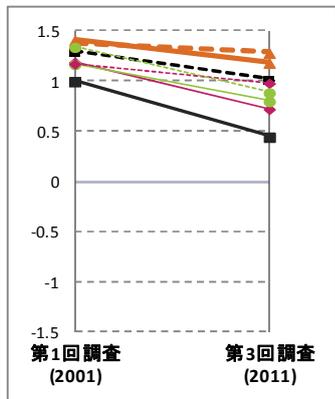


図表 3-39

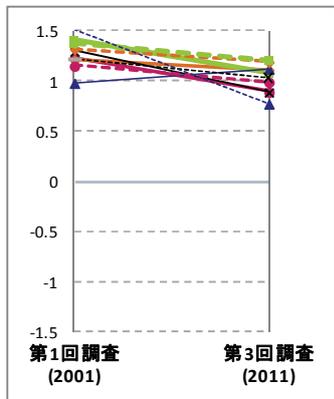


職業生活に役立つ資格を取りたい

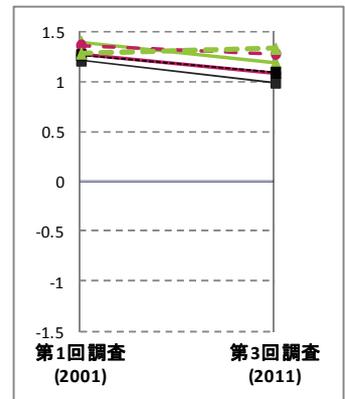
図表 3-40



図表 3-41

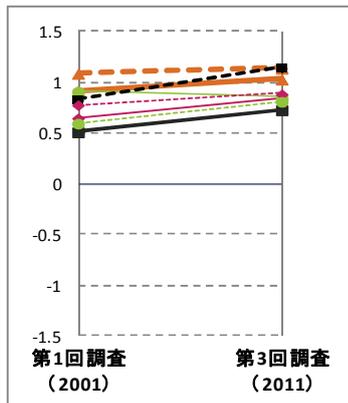


図表 3-42

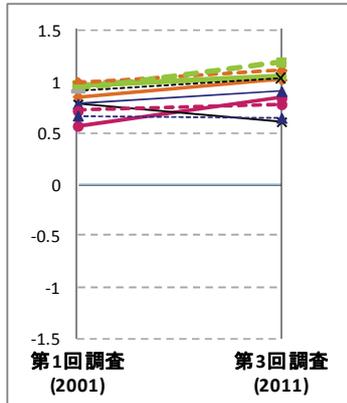


ひとの役に立つ仕事をしたい

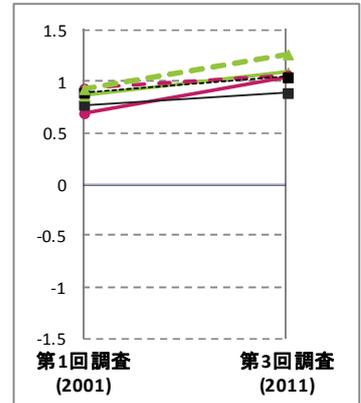
図表 3-43



図表 3-44



図表 3-45



4. 栄達志向

図表3-46～3-54は、「栄達志向」の3項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

第1回調査よりも第3回調査の方が、3項目ともおおむね得点が低い傾向にある²²。ただし、こうした全体的な傾向とは逆に変化している例外もある。「有名になりたい」における単身の女性（図表3-51、-0.66から-0.39へ0.27増加）、無業・その他の女性（図表3-49、-0.89から-0.65へ0.24増加）、派遣・契約の男性（図表3-49、-0.60から-0.50へ0.10増加）、大学・大学院卒の女性（図表3-50、-0.74から-0.73へ0.01増加）、および「ひとよりも高い収入を得たい」における大学・大学院卒の女性（図表3-53、0.39から0.41へ0.02増加）である。

2時点で特に得点差が大きなものをあげると、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」における無業・その他の男性（図表3-46、0.63から-0.31へ0.94減少）、「有名になりたい」における無業・その他の男性（図表3-49、0.31から-0.62へ0.94減少）や中卒、高校中退の男性（図表3-50、0.34から-0.55へ0.90減少）、「ひとよりも高い収入を得たい」における無業・その他の男性（図表3-52、1.17から0.44へ0.73減少）や中卒、高校中退の女性（図表3-53、1.09から0.03へ1.06減少）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリ間で、第1回調査と第3回調査のどちらで意識の差があるかは明確には言い難いが、敢えて言えば、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」（図表3-46～3-48）と「有名になりたい」（図表3-49～3-51）は第1回調査の方が、「ひとよりも高い収入を得たい」（図表3-52～3-54）は第3回調査の方が、雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおいて、カテゴリ間の意識の差がある。

男性と女性の意識の差が縮まったカテゴリは、3項目における無業・その他の男女（図表3-46、図表3-49、図表3-52）、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」における中卒の男女、高校中退の男女（図表3-47、図表3-50）、「有名になりたい」と「ひとよりも高い収入を得たい」における単身の男女（図表3-51、図表3-54）、などである。差が逆に広がったカテゴリは、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」における高等教育中退の男女（図表3-47）、「ひとよりも高い収入を得たい」における専門・短大・高専卒の男女、中卒、高校中退の男女、高等教育中退の男女（図表3-53）、などである。

雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリ間の意識の差が変化したかという点については、雇用形態で（特に「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」と「有名になりたい」において）意識の差が縮まったと言える。

²² 特に、中卒・高等教育中退の男性においては、職業意識全15項目のうち、変化が大きかった上位3つの項目が全て「栄達志向」に該当する項目である点は注目に値する。

雇用形態別

- 男性 正規雇用
- 男性 派遣・契約
- 男性 アルバイト・パート
- 男性 無業・その他
- 女性 正規雇用
- 女性 派遣・契約
- 女性 アルバイト・パート
- 女性 無業・その他

学歴別

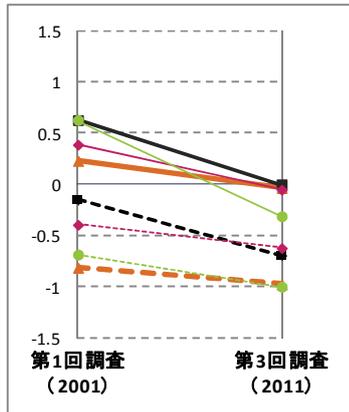
- 男性 高卒
- 男性 専門・短大・高専卒
- 男性 大学・大学院卒
- ×— 男性 中卒・高校中退
- 男性 高等教育中退
- 女性 高卒
- 女性 専門・短大・高専卒
- 女性 大学・大学院卒
- ×— 女性 中卒・高校中退
- 女性 高等教育中退

家族形態別

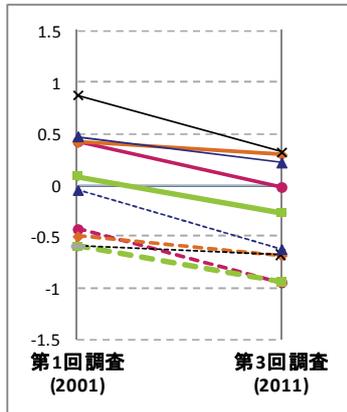
- 男性 単身
- 男性 無配偶・親元
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 無配偶・親元
- 女性 配偶者・子供同居

将来は独立して自分の店や会社を持ちたい

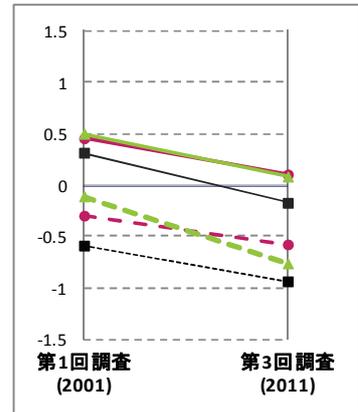
図表 3-46



図表 3-47

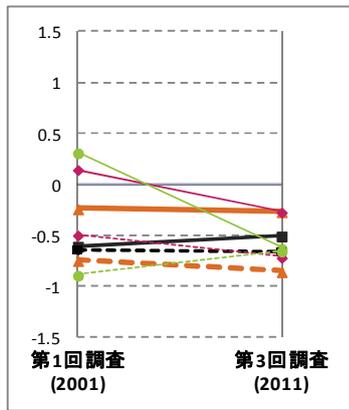


図表 3-48

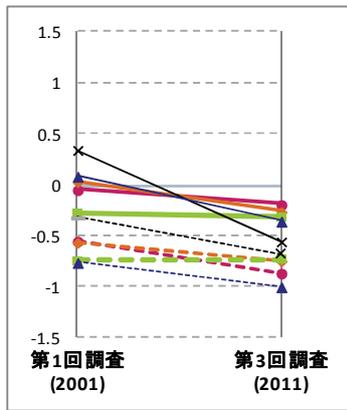


有名になりたい

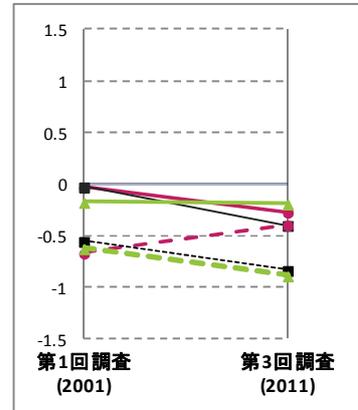
図表 3-49



図表 3-50

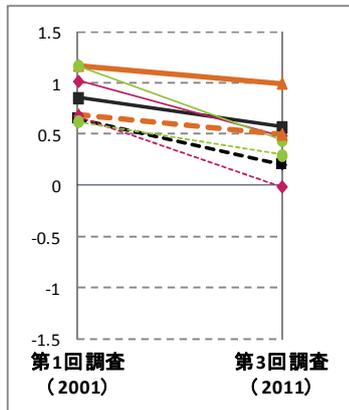


図表 3-51

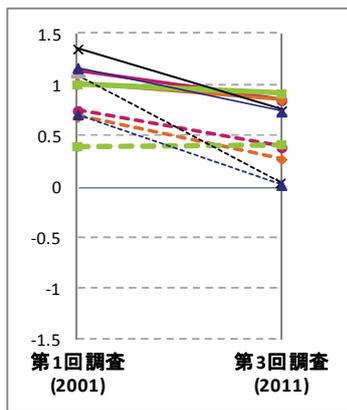


ひとよりも高い収入を得たい

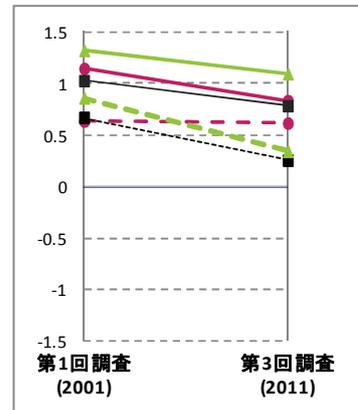
図表 3-52



図表 3-53



図表 3-54



以上をまとめると、「栄達志向」の項目について、2時点の間を変化と捉えるならば、独立志向、有名願望やひとよりも高い収入を得ることへの希望は減少傾向にある。現在の20歳代の職業アスピレーションは全体的に低下しており、野心的に何かをすることに対して冷めた見方をしているのかもしれない。

5. 仕事離れ・迷い

図表3-55～3-63は、「仕事離れ・迷い」の3項目それぞれについて、雇用形態、学歴、家族形態ごとにその結果を示したものである。

例外がいくつかあるものの、全体的に第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」（図表3-55～3-57）は得点が低く、「自分に向いている仕事かわからない」（図表3-58～3-60）と「できれば仕事はしたくない」（図表3-61～3-63）は得点が高い傾向にある。

ただし、例外も少なからずある。その中で、第1回調査と第3回調査の得点差が大きなのは、第1回調査よりも第3回調査の方が得点が低い、「自分に向いている仕事かわからない」における派遣・契約の男性（図表3-58、0.03から-0.55へ0.58減少）、中卒、高校中退の男性（図表3-59、0.08から-0.13へ0.21減少）および中卒、高校中退の女性（図表3-59、0.05から-0.18へ0.22減少）、配偶者・子供同居の女性（図表3-60、-0.15から-0.62へ0.46減少）、「できれば仕事はしたくない」における派遣・契約の男性（図表3-61、-0.54から-0.98へ0.44減少）、などである。

2時点で特に得点差が大きなものあげると、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」における無業・その他の女性（図表3-55、0.43から-0.19へ0.61減少）や高等教育中退の女性（図表3-56、0.29から-0.20へ0.49減少）、「自分に向いている仕事かわからない」における派遣・契約の男性（図表3-58、0.03から-0.55へ0.58減少）や高等教育中退の男性（図表3-59、-0.61から0.01へ0.62増加）、「できれば仕事はしたくない」における高等教育中退の男性（図表3-62、-0.64から-0.14へ0.51増加）、などとなる。

雇用形態、学歴、家族形態それぞれにおけるカテゴリー間で、第1回調査と第3回調査のどちらで意識の差があるかは一概には言い難いが、「できれば仕事はしたくない」の項目に関して（図表3-61～3-63）、および家族形態において（図表3-57、図表3-60、図表3-63）は、第3回調査の方がカテゴリー間の意識の差がある。

第1回調査と第3回調査で男性と女性の意識の差を比較した際には、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」における無業・その他の男女（図表3-55）や高等教育中退の男女（図表3-56）、「自分に向いている仕事かわからない」における高等教育中退の男女の間の意識の差が特に縮まっている。逆に、「自分に向いている仕事かわからない」における無業・その他の男女（図表3-58）、「できれば仕事はしたくない」におけるアルバイト・パートの男女（図表3-61）や中卒、高校中退の男女（図表3-62）の間の意識の

雇用形態別

学歴別

家族形態別

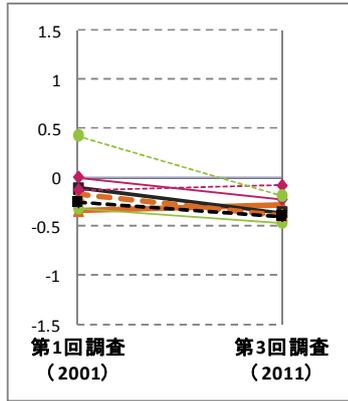
- 男性 正規雇用
- 男性 派遣・契約
- 男性 アルバイト・パート
- 男性 無業・その他
- 女性 正規雇用
- 女性 派遣・契約
- 女性 アルバイト・パート
- 女性 無業・その他

- 男性 高卒
- 男性 大学・大学院卒
- 男性 高等教育中退
- 男性 専門・短大・高専卒
- 男性 中卒・高校中退
- 女性 高卒
- 女性 大学・大学院卒
- 女性 高等教育中退
- 女性 専門・短大・高専卒
- 女性 中卒・高校中退

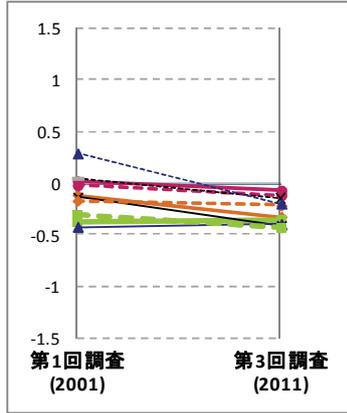
- 男性 単身
- 男性 無配偶・親元
- 男性 配偶者・子供同居
- 女性 単身
- 女性 無配偶・親元
- 女性 配偶者・子供同居

将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい

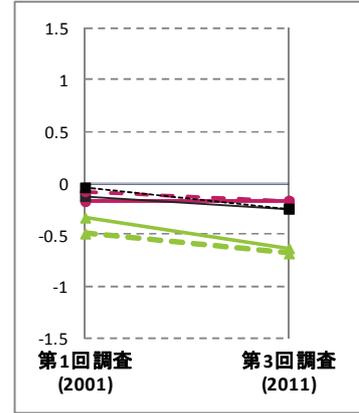
図表 3-55



図表 3-56

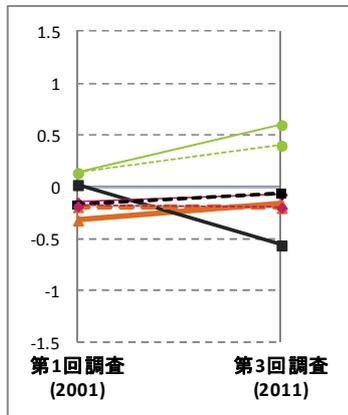


図表 3-57

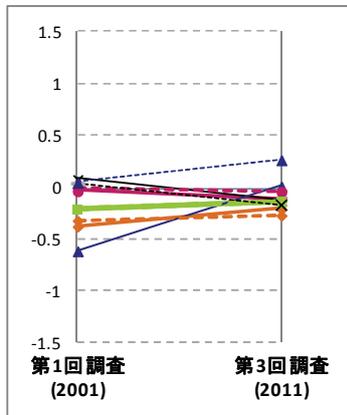


自分に向いている仕事が見つからない

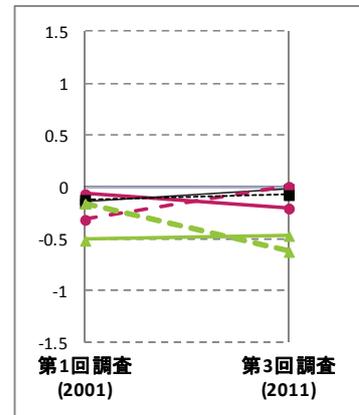
図表 3-58



図表 3-59

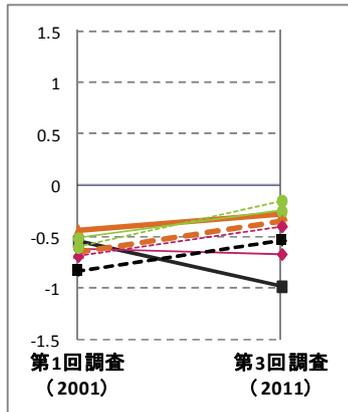


図表 3-60

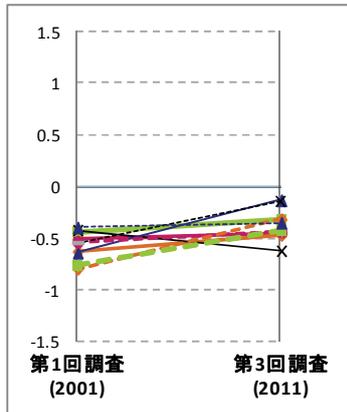


できれば仕事はしたくない

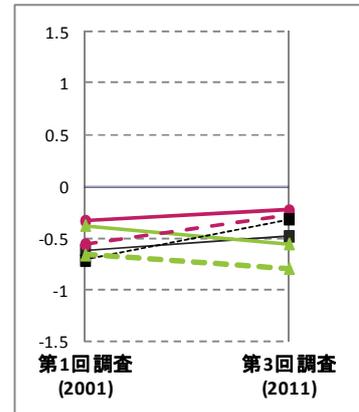
図表 3-61



図表 3-62



図表 3-63



差が特に広がっている。

雇用形態、学歴、家族形態のうち、どれでもっともカテゴリー間の意識の差が変化したかという点については、雇用形態における各カテゴリー間の意識の差が他の2つに比べて特に変化したと言える（図表3-55、図表3-58、図表3-61。「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に関しては意識の差が小さくなり、他の2項目に関しては大きくなった）。

以上をまとめると、「仕事離れ・迷い」の項目について2時点の間を変化と捉えるならば、現在の20歳代が今を楽しく生きて将来のことを考えなくなっている、とは言えないだろう。そして、派遣・契約の男性や高等教育中退の男性等の一部を除いて、第1回調査時に比べて、自分に向いている仕事が見つからないという迷いをよりいっそう抱え、職業世界からの離脱志向が高まっている。

第4節 まとめ

本章では、第3回若者のワークスタイル調査の職業意識の項目の分布を性別、年齢層、現在の雇用形態、学歴、キャリア類型、家族形態ごとに確認したうえで、第1回調査と第3回調査の比較を行った。明らかになった知見は以下のように要約できる。

- ①第3回調査で東京都内に住む1981年～1991年生まれの者の全体の傾向を見た際、仮に経済的な不利や就労の不安定さと、フリーターに象徴されるような働き方の自由さが天秤にかけられるとして、後者が支持されるとは言いがたい。専門的な知識や技術を磨くこと、資格取得といった能力向上に対する志向は8～9割の者に支持されている。「ひとよりも高い収入を得たい」という経済的な向上への支持は7割弱存在するものの、独立や有名になることに対する支持は、全体の4割を下回っている。全体の3～4割の者が「できれば仕事はしたくない」などの仕事離れの意識をもっており、また、4割を超えた者が自らの仕事についての迷いを抱いている。
- ②第3回調査で男性と女性を比較した際、その分布で特に違いが目立ったのは「ひとよりも高い収入を得たい」などの「栄達志向」に該当する項目で、男性の方が女性に比して肯定の割合が高い。
- ③第3回調査で男女別に20歳代前半層と後半層を比較すると、男性では、正社員志向や能力向上について、後半層の方が支持しているという傾向を確認できた。一方女性においては、前半層の方が、典型的な就労行動に縛られないフリーターのようなあり方への支持・共感が存在しており、「自分に向いている仕事が見つからない」「できれば仕事はしたくない」「有名になりたい」といった項目への肯定も高いことが確認できた。
- ④第3回調査で男女別に雇用形態間の職業意識を比較した際、男性に関して、正規雇用は堅実・安定的な意識をもちつつも迷いや仕事離れ志向があり、派遣・契約は自分の働き方に

対する明確なビジョンや既存の働き方・制度から自由な志向をもつ傾向にある。また、アルバイト・パートは、やりたいことを優先する考え方や雇用形態にこだわらない考え方をもち、無業・その他の者は、刹那的な生き方や自由な働き方を肯定せず、迷いのなかで、できれば仕事はしたくないという意識をもっている傾向が確認できた。一方女性に関しては、正規雇用が安定的な雇用を支持する堅実な志向をもっている点は男性と共通しているが、派遣・契約の「能力向上志向」や「仕事離れ・迷い」の項目に対する肯定回答の割合が他の雇用形態に比べて低いとは言い切れない点などが、男性と異なった。

⑤第3回調査で男女別に学歴間の職業意識を比較した際、男性に関して、大卒・大学院卒は、フリーターのような働き方を支持せず正社員志向が高い一方で、できれば仕事はしたくないという意識も垣間見える。また、専門・短大・高専卒はやりたいこと志向や独立志向が強く、高卒は刹那的な生き方への支持や迷いを抱えながらも、安定的な職業環境で真面目に働く志向ももっているといった傾向が確認できた。一方女性に関しては、全般的には男性と似た傾向があるものの、「フリーター共感」に該当する項目において、高卒と専門・短大・高専卒の間に意識の違いが見られるという点などが、男性と異なった。

⑥第3回調査で男女別にキャリア類型間の職業意識を比較した際、男性の特徴は、非典型一貫型が「できれば仕事はしたくない」に対する肯定が最も低いこと、他形態から正社員型が「夢追求型」フリーターに特徴的な項目（「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」）に対する肯定が高いこと、などだった。一方女性に関しては、男性と対照的に正社員転職型が「自分に向いている仕事かわからない」の肯定が最も低い点などが特徴的だった。

⑦第3回調査で男女別に家族形態間の職業意識を比較した際、女性の方が男性よりも家族形態による違いが顕著だった。配偶者・子供同居の女性は他の家族形態の女性に比べて、「仕事離れ・迷い」の項目への支持が低く、安定性に関わる項目への支持が高かった。また、単身の女性は他の家族形態の女性に比べて、「栄達志向」の項目や新しい可能性へのチャレンジに関する項目への支持が高かった。

⑧第3回調査で新設された3項目を男女別に雇用形態間で比較した際、男女ともに、無業・その他が政治的有効感覚や対人関係自己評価の項目に対する肯定が低い。政治的有効感覚に関しては、男性ではアルバイト・パートが、女性では派遣・契約が、正規雇用と同程度に高かった。

⑨「フリーター共感」に該当する各項目を時点比較すると、第1回調査より第3回調査の方が、「今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける」「若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい」「いろいろな職業を経験したい」「やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない」に関しては賛成が減少、「一つの企業に長く勤めるほうがよい」「フリーターより正社員で働いたほうがトクだ」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。2001年から、やりたいこと志向は減退し、安定性を求める志向が高まった。

- ⑩「能力向上志向」に該当する3項目は、2時点とも肯定の回答傾向を示しているが、第1回調査より第3回調査の方が、「専門的な知識や技術を磨きたい」と「職業生活に役立つ資格を取りたい」に関しては賛成が減少、「ひとの役に立つ仕事をしたい」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。
- ⑪「栄達志向」に該当する各項目を時点比較すると、例外がいくつかあるものの、第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来は独立して自分の店や会社を持ちたい」「有名になりたい」「ひとよりも高い収入を得たい」の3項目ともおおむね賛成が減少する傾向が見出された。
- ⑫「仕事離れ・迷い」に該当する各項目を時点比較すると、第1回調査よりも第3回調査の方が、「将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい」に関しては賛成が減少、「自分に向いている仕事が見つからない」と「できれば仕事はしたくない」に関しては賛成が増加する傾向が見出された。今を楽しく生きて将来のことを考えなくなっているとは言えず、2001年から、一部の若者を除いて、自分に向いている仕事が見つからないという迷いをより抱えるようになり、職業世界からの離脱志向が高まった。

以上、本章の検討から見てきたのは、2001年に比べて堅実な意識を表明する20歳代の若者の姿だった²³。下村（2002: 99）は、「フリーターにとっては労働の対価として賃金を得るような合理的な経済行動はそれほど問題ではない。フリーターの職業意識を理解しようとするのであれば、そんなことより『自由』『経験』『出会い』が大切だと思えなければならない」と述べたが、そうしたフリーター層さえも、合理的で堅実な意識をもちつつあるのが2011年現在と言えるのではないか。今回の分析で用いた2時点のデータは対象者の抽出方法が異なるので、変化について積極的に述べることには特に慎重でなければならないが、そういった点を考慮しても、「大人」の側が危惧する若者に特有の自由な働き方は不利であるという認識が若者の間でも高まり、「大人」が勧める合理的で堅実な働き方への支持に落ち着いてきていると言いきそうである。その意味では、かつてのようなフリーター的な意識は後景化したのかもしれない。「フリーターを支える意識は広く若者に共有されている」（日本労働研究機構 2001: 17）（下村 2002: 90）とされた2000年代前半。それに対して、2011年現在、若者の間に広く共有されている職業意識があるという点は変わらないが、共有されている意識の内実は、かつて広く共有されていたフリーターを支える意識が安定性を覆すほどのものではなくなったというものである。

²³ 本章から見てきた、やりたいこと志向の減退や意識の「堅実化」いった傾向は、2001年から2011年の間にみられるいくつかの先行研究の知見と重なる。例えば、久木元（2010: 142）は、「将来への不安がクローズアップされる中で、やりたいこと志向が後景化しやすいものになっていると思われる」と述べている。また、関西圏の大学生への継続調査を行っている片桐（2009: 151-172）は、男子学生の手堅く生きる志向が2002年の調査では1997年に比べ大きく上昇したが、2007年調査時には若干減少したというデータを提示し、その生活目標が就職状況に影響されていると論じている。

さらに、この若者の意識の「堅実化」の裏には、職業アスピレーションの低下や職業世界からの離脱志向も垣間見える。また、この意識の「堅実化」は、キャリア形成に結びつく具体的な行動が支持されていることと必ずしも同義ではない。安定を優先し、「堅実化」が若者たちの目標となる一方で、それを達成するための手段の具体性が不在であると感じさせる現状は、まさにアノミー（Merton 1957=1961: 121-178）であり、こうした状況に対して労働行政としては、実現可能性や具体性を伴った対応が求められる。

フリーター離脱の資源となりうる専門知識や資格の取得に対する若年者の意欲に応えるための一つの支援として、かつて、職業能力開発の機会の提供を日本労働研究機構（2001: 27）は提案していた。しかし、そうした意欲自体の低下の兆しも見える今日、資格や専門知識に対して具体的なイメージをもつための教育の機会を提供するなど、自ら能力を向上させ、本人にあったキャリア形成の道筋を選択することに結びつくための支援にもより一層力を入れることが望まれる。そのためには、行われる支援が若者に届くための具体性を伴ったものか、支援の場で若者を前にして継続的に問い直していくことが、支援する側にも必要だと考えられる。

なお、第1章でも説明しているが、20歳代を対象とした本調査とは別に、30歳代を対象とした調査が2011年7～9月に実施されている。本章の分析で得られた知見は、この30歳代の分析においても妥当するか。本章では十分に検討できなかった、年齢段階や世代・コーホートといった観点を盛り込み、別途分析が必要である。

文献

- 江上節子，1991，「データが語る若者の労働観——企業の意識改革は時間短縮から」『企業と人材』552: 5-9.
- 本田由紀，2002，「ジェンダーという観点から見たフリーター」小杉礼子編『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構，149-174.
- 堀田千秋，1991，「今日の若者にみる職業意識の特質と問題」『労働時報』44(4): 16-19.
- 亀山俊朗，2006，「フリーターの労働観——若者の労働観は未熟か」太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社，144-167.
- 片桐新自，2009，『不安定社会の中の若者たち——大学生調査から見るこの20年』世界思想社.
- 片瀬一男・元治恵子，2008，「進路意識はどのように変容したのか——ジェンダー・トラックの弛緩？」海野道郎・片瀬一男編『＜失われた時代＞の高校生の意識』有斐閣，93-118.
- 久木元真吾，2010，『『やりたいこと』の現在』小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 労働』日本図書センター，117-148.
- Merton, R. K., [1949] 1957, *Social Theory and Social Structure*, Revised Edition., New York: The Free Press. (=1961, 森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)

- 村松幹子，2005，「若者のライフスタイルと職業意識」矢島正見・耳塚寛明編著『第二版 変わる若者と職業世界——トランジッションの社会学』学文社，79-92.
- 日本労働研究機構，2000，『フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より』.
- ，2001，『大都市の若者の就業行動と意識——広がるフリーター経験と共感』.
- 佐藤博樹ほか，1991，「現代の若者意識と企業の対応を探る」『労働時報』44(4): 4-15.
- 下村英雄，2002，「フリーターの職業意識とその形成過程——『やりたいこと』志向の虚実」小杉礼子編『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構，75-99.

参考 有効ケース数一覧

男性 第3回調査(2011年)	男性全体		非典型雇用					専門・大学・中卒、					他形態				無配 配偶	
	20歳代 前半	20歳代 後半	正規 雇用	アルバイト			高卒	専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	正社員 定着	非典型 一貫	から正 社員	正社員 転職	単身	無配 偶・親 元	配偶 者・子 供同居
				派遣・ 契約	パート	無業・ その他												
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	422	605	688	56	172	61	218	233	429	56	73	410	162	162	77	269	527	149
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	421	603	687	56	171	61	218	231	429	55	73	410	161	162	76	268	527	147
いろいろな職業を経験したい	422	602	686	56	171	61	218	233	428	55	73	409	161	162	77	268	528	148
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	421	605	689	56	170	61	218	233	428	56	73	410	161	163	77	269	526	149
一つの企業に長く勤めるほうがよい	421	605	689	56	171	61	219	233	429	55	72	410	161	163	77	269	527	148
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	420	605	687	56	171	61	219	232	427	56	73	408	161	163	77	268	526	149
専門的な知識や技術を磨きたい	421	604	688	55	172	61	218	233	427	56	73	409	162	163	77	268	527	149
職業生活に役立つ資格を取りたい	421	606	689	56	171	61	218	233	429	56	73	410	161	163	77	269	527	149
ひとの役に立つ仕事をしたい	422	604	688	56	171	61	218	233	428	56	73	409	162	163	77	268	528	148
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	421	604	687	56	172	61	219	233	426	56	73	409	162	163	76	269	527	147
有名になりたい	422	606	689	56	172	61	219	233	429	56	73	410	162	163	77	269	528	149
ひとよりも高い収入を得たい	422	606	689	56	172	61	219	233	429	56	73	410	162	163	77	269	528	149
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	420	604	688	56	170	61	219	232	427	56	73	409	160	163	77	266	527	149
自分に向いている仕事かわからない	420	605	688	56	171	61	219	233	427	56	72	409	161	163	77	268	526	149
できれば仕事はしたくない	419	602	685	56	171	60	218	231	426	56	73	409	161	161	77	267	525	148
誰とでもすぐに仲良くなれる	421	605	687	56	172	61	219	232	428	56	73	408	162	163	77	269	526	149
ほとんどの人は信頼できる	422	604	689	56	172	60	219	233	427	56	73	410	162	163	77	268	528	149
自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない	420	606	687	56	172	61	219	233	428	55	73	409	162	162	77	268	528	149

女性 第3回調査(2011年)	男性全体		非典型雇用					専門・大学・中卒、					他形態				無配 配偶	
	20歳代 前半	20歳代 後半	正規 雇用	アルバイト			高卒	専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	正社員 定着	非典型 一貫	から正 社員	正社員 転職	単身	無配 偶・親 元	配偶 者・子 供同居
				派遣・ 契約	パート	無業・ その他												
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130
いろいろな職業を経験したい	525	500	562	131	251	54	161	357	417	34	44	397	280	82	54	170	639	130
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	524	500	561	131	250	54	161	355	417	34	45	397	280	81	54	171	637	130
一つの企業に長く勤めるほうがよい	525	500	561	131	252	53	160	357	417	34	45	396	281	82	54	171	639	130
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	524	501	561	131	251	54	162	355	417	34	45	397	280	82	53	171	639	130
専門的な知識や技術を磨きたい	524	501	560	131	252	54	162	356	416	34	45	395	281	82	54	170	639	130
職業生活に役立つ資格を取りたい	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130
ひとの役に立つ仕事をしたい	525	501	561	131	252	54	162	357	417	33	45	397	281	81	54	171	639	130
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	522	501	561	131	249	54	162	354	416	34	45	396	278	82	54	170	637	130
有名になりたい	525	501	561	131	252	54	162	356	417	34	45	396	281	82	54	171	640	130
ひとよりも高い収入を得たい	525	500	560	131	252	54	161	357	416	34	45	395	281	82	54	171	638	130
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	525	500	561	131	251	54	161	356	417	34	45	397	281	82	53	171	640	129
自分に向いている仕事かわからない	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130
できれば仕事はしたくない	525	501	561	131	252	54	162	356	417	34	45	396	281	82	54	170	640	130
誰とでもすぐに仲良くなれる	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130
ほとんどの人は信頼できる	526	501	562	131	252	54	162	357	417	34	45	397	281	82	54	171	640	130
自分には政府のすることに対して、それを左右する力はない	525	498	559	130	252	54	162	355	415	34	45	396	280	80	54	171	637	129

男性 第1回調査(2001年)	非典型雇用					専門・大学・中卒、					無配 配偶		
	正規 雇用	派遣・ 契約	パート	無業・ その他	高卒	専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	単身	無配 偶・親 元	配偶 者・子 供同居	
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	305	35	371	35	252	191	197	73	59	186	433	122	
いろいろな職業を経験したい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
一つの企業に長く勤めるほうがよい	305	35	372	35	254	191	196	73	59	187	432	122	
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	306	35	371	35	253	191	197	73	59	186	433	122	
専門的な知識や技術を磨きたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
職業生活に役立つ資格を取りたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
ひとの役に立つ仕事をしたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
有名になりたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
ひとよりも高い収入を得たい	306	35	371	35	253	191	197	73	59	186	433	122	
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	306	35	372	35	254	191	197	73	59	187	433	122	
自分に向いている仕事かわからない	306	35	371	35	253	191	197	73	59	186	433	122	
できれば仕事はしたくない	305	35	371	35	253	190	197	73	59	186	432	122	

女性 第1回調査(2001年)	非典型雇用					専門・大学・中卒、					無配 配偶		
	正規 雇用	派遣・ 契約	パート	無業・ その他	高卒	専門・ 短大・ 大学院 卒	大学・ 大学院 卒	中卒、 高校中 退	高等教 育中退	単身	無配 偶・親 元	配偶 者・子 供同居	
今の世の中、定職に就かなくても暮らしていける	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
若いうちは仕事よりも自分のやりたいことを優先させたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
いろいろな職業を経験したい	200	58	379	35	227	316	108	22	21	100	447	92	
やりたい仕事なら正社員でもフリーターでもこだわらない	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
一つの企業に長く勤めるほうがよい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
フリーターより正社員で働いたほうがトクだ	200	58	378	35	226	315	109	22	21	100	446	92	
専門的な知識や技術を磨きたい	201	57	378	35	227	314	109	22	21	101	445	92	
職業生活に役立つ資格を取りたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
ひとの役に立つ仕事をしたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
将来は独立して自分の店や会社を持ちたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
有名になりたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
ひとよりも高い収入を得たい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
将来のことを考えるよりも今を楽しく生きたい	201	58	379	35	227	316	109	22	21	101	447	92	
自分に向いている仕事かわからない	200	58	378	35	227	314	109	22	21	101	445	92	
できれば仕事はしたくない	200	58	377	35	225	316	109	22	20	100	446	92	